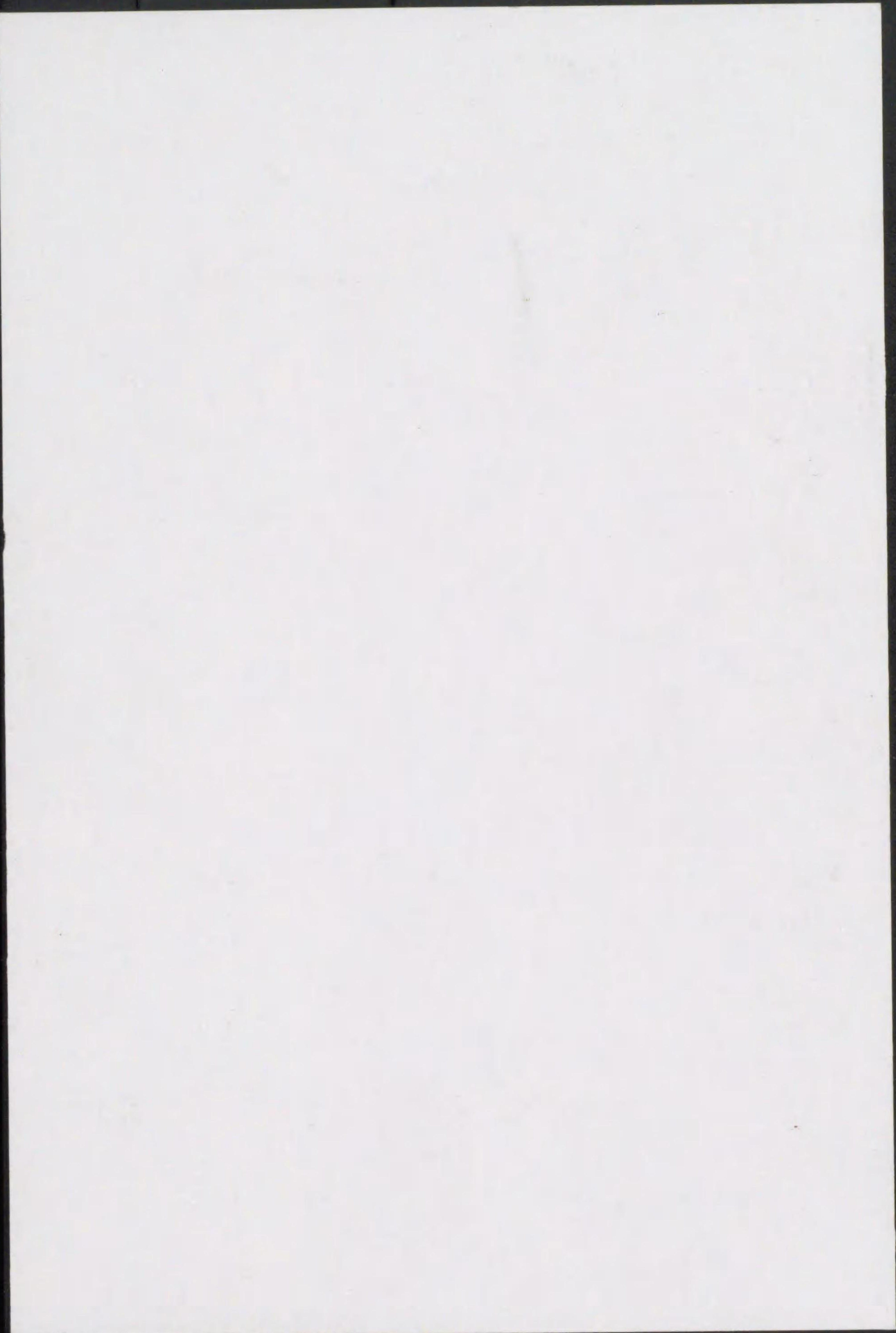


609-88



1200501533653



193



無量光如來安樂莊嚴經講話





無量光如來安樂莊嚴經講話



609-88

無量光如來安樂莊嚴經講話

目次

總論	一
本文解説	一六
一、序分	一六
第一章 證信序	一六
(1) 六事成就	一六
(2) 說法會坐の長老大聲聞の徳	二一
(3) 長老大聲聞の名	二九
(4) 說法會坐の菩薩	三一
第二章 發起序	三三
(1) 阿難陀の請問	三三

目次

(2) 如來の現相……………三四

(3) 佛々相念……………三六

(4) 阿難陀の所問に對する世尊の問……………三七

(5) 阿難陀の回答……………三八

(6) 世尊の問意稱嘆と無障礙の慧見……………三九

(7) 如來の諸根は損害なし……………四〇

(8) 如來の出世に値ひ難く大悲の攝受は得難し……………四二

(9) 如來の義理を説かん……………四三

(10) 阿難世尊に聽受を請ふ……………四四

二、正宗分

無量壽如來成道因果……………四四

(一) 成道の因—發願……………四四

第三章 世間自在王如來と法藏比丘……………四四

(1) 宿昔過去の諸佛と世間自在王如來……………四四

(2) 發願修行の人法藏比丘……………四九

第四章 嘆 佛 偈……………五〇

(1) 法藏比丘偈を説かんとして師佛を敬す……………五〇

(2) 一、無量光明他に比類なし……………五一

(3) 二、有情の最勝者色相も亦限なし……………五二

(4) 三、深くして廣大精微なる法に達す……………五三

(5) 四、佛の威光は一切方に輝く……………五三

(6) 五、我は殊勝誓願を起して一切有情を救濟せん……………五四

(7) 六、一切諸佛を供養して福德最勝の菩提を希ふ……………五四

(8) 七、一切光明を放つ精進力を起さん……………五五

(9) 八、我が國土は廣大最尊第一……………五六

(10) 九、佛よ私の證明たれ……………五六

(11) 十、無礙の智は我が心を了知す……………五七

第五章 法藏比丘の請説と師佛の説現……………五八

(1) 法藏比丘の請説……………五八

(2) 師佛の抑止……………五九

(3) 比丘の再請……………五九

(4) 師佛の説現……………五九

第六章 法藏比丘の諸佛國選擇攝受と誓願建立……………六〇

(1) 諸佛國選擇攝受と五劫思惟により誓願建立……………六〇

第七章 法藏比丘無數佛國成就を攝受し終つて殊勝大願を師佛に啓白を誓ふ……………六一

(1) 更に優秀なる無數の佛國成就を攝受し終る……………六一

(2) 師佛所願を宣説せしむ……………六二

(3) 殊勝大願の啓白を誓ふ……………六三

(二) 願文總説……………六四

第八章 別願解説……………七二

第一願 無三惡趣……………七二

第二願 不更惡趣……………七四

第三願 悉皆金色……………七五

第四願 無有好醜……………七六

第五願 神足智通……………七七

第六願 宿命智通……………七九

第七願 天眼智通……………八一

第八願 天耳智通……………八二

第九願 他心智通……………八三

第十願 漏盡智通……………八四

第十一願 必至滅度……………八五

第十二願 聲聞無數……………八九

第十三願 光明無量……………九一

第十四願 眷屬長壽……………九三

第十五願 壽命無量……………九四

第十六願 離譏嫌名……………九六

第十七願 諸佛稱揚……………九六

第十八願 臨終現前……………九七

第十九願 植諸德本、念佛往生……………一〇〇

第二十願 一生補處……………一〇四

第二十一願 供養諸佛……………一〇九

第二十二願 供具如意……………一一〇

第二十三願 說一切智……………一一六

第二十四願 供養諸佛……………一一七

第二十五願	那羅延身	一四八
第二十六願	土德難量	一四八
第二十七願	見道場樹	一四八
第二十八願	得辯才智	一四八
第二十九願	國土清淨	一四八
第三十願	寶香合成	一四八
第三十一願	寶雨妙雲	一四八
第三十二願	觸光柔軟	一四八
第三十三願	聞名得忍	一四八
第三十四願	女人成佛	一四八
第三十五願	人天致敬	一四八
第三十六願	衣服隨念	一四八
第三十七願	受樂無染	一四八
第三十八願	見諸佛土	一四八
第三十九願	諸根具足	一四八
第四十願	住定見佛	一四八
第四十一願	生尊貴家	一四八
第四十二願	具足德本	一四八

第四十三願	住定敬佛	一四八
第四十四願	隨意開法	一五〇
第四十五願	得不退轉	一五〇
第四十六願	得三法忍	一五一

第九章 重誓偈

(1)	法藏比丘重誓を偈説す	一五三
(2)	一、無等の布施を受くるものと成らざるべし	一五五
(3)	二、種々の寶の王國の王と成らざるべし	一五七
(4)	三、力を有する世界の主と成らざるべし	一五八
(5)	四、平等覺に到達せる世界の導師と成らざるべし	一五九
(6)	五、廣大なる光の限りなき主	一六〇
(7)	六、一切の黑暗を破る	一六一
(8)	七、太陽も天に輝かず	一六二
(9)	八、佛の獅子吼を吼へん	一六三
(10)	九、有情の最勝者とならん	一六四
(11)	十、人中の導師たらん	一六七
(12)	十一、是の如き本願が満足して	一六七

(13) 十二、世界に佛とならん……………一六八

(三) 修行……………一六九

第十章 法藏菩薩誓願成就と修行の相……………一六九

(1) 法藏菩薩誓願を具足成就す……………一六九

(2) 法藏菩薩誓願を宣説し誓約し確立す……………一七一

(3) 不可思議無等無算の年の間菩薩の無量徳を積植す……………一七三

(4) 六波羅密を行じ他人をして行はしむ……………一八二

(5) 無量の有情を無上正徧知に安住せしむ……………一八三

(6) 無量諸佛を供養し人天を安住せしむ……………一八四

(7) 珍妙華香衣服飲食伎樂を流出して一切に自在を得……………一八八

(四) 成道の果……………一九二

第十一章 成佛の過現未問答……………一九二

(1) 法藏菩薩の成佛か否かを問ふ……………一九二

(2) 既に成佛して今現に住持し説法す……………一九三

(五) 佛莊嚴功德成就……………一九六

第十二章 光明無量、觸光柔輦の願成就……………一九六

- (1) 光明の相……………一九六
- (2) 光明の徳號……………二〇〇
- (3) 光明の徳用……………二〇一
- (4) 光明功德の量……………二〇二

第十三章 聲聞無數の願成就……………二〇三

- (1) 無量の聲聞數は計算するに容易ならず……………二〇三
- (2) 毛端の百分の一の水滴と大海の水……………二〇五
- (3) 計算せる數は一滴にして殘餘は大海の如し……………二〇六

第十四章 壽命無量の願成就……………二〇七

- (1) 無量光如來の壽命は無量なり……………二〇七

(六) 國土莊嚴功德成就……………二〇九

第十五章 土徳難量と無三惡趣の願成就……………二〇九

- (1) 安樂世界は繁盛安穩にして餓鬼畜生等無し……………二〇九

第十六章 寶樹莊嚴……………二一〇

(1) 安樂世界は種々の寶樹を以て莊嚴せらる……………二二〇

(2) 一寶乃至七寶合成の寶樹と妙音演出……………二二一

(3) 七寶樹タラ行樹周遍し蓮華を以て覆る……………二二四

(4) 蓮華は一乃至十由旬あり……………二二五

(5) 三十六億千の光と佛出づ……………二二五

第十七章 安樂國土の地相

(1) 黒山乃至輪圍山無し……………二二六

(2) 四天王三十三天は如何にして住居するや……………二二八

(3) 業に依つてなされたる結果は不可思議……………二二八

(4) 諸佛世尊には不可思議ならず……………二一九

(5) 未來の衆生のためこの義理を問ふ……………二二〇

第十八章 天耳通、離譏嫌名の願成就

(1) 安樂國には種々の河あり微妙の音出づ……………二二一

(2) 望に應じて水至り快樂を得……………二二二

(3) 香水流れ妙香花にて覆はれ化鳥の妙音にて滿つ……………二二四

(4) 願に應じて各種の妙音を聞く……………二二六

(5) 安樂世界には一切不善の聲なし……………二三八

(6) 快樂の因縁は一劫を経るも宣説する能はず……………二四〇

第十九章 悉皆金色、寶香合成、衣服隨念の願成就

(1) 諸有情は悉く是の如き色相により殊勝……………二四一

(2) 有情は食物にて榮養を得ることなし……………二四五

(3) 天香を以て佛國の一切を薫す……………二四六

(4) 種々の寶服佛國に充ち着ることを感ず……………二四八

(5) 望に隨つて各色の飾を得……………二四九

(6) 望に隨つて天宮現はる……………二四九

第二十章 無有好醜、國土清淨、女人成佛の願成就

(1) 天と人との差別なく園林宮殿乃至自在力は輝き人間は他化自在天と見らる……………二五一

第二十一章 受樂無染の願成就

(1) 四方より風吹きて多くの百花を散す……………二五四

(2) 華聚は軟かく觸れて心地よし……………二五五

(3) 比丘が滅盡定に到達したる如き快感を起す……………二五六

第二十二章 光明の形相 二五八
 (1) 一切光輝の相なく家宅園林攝受の思なし 二五八

第二十三章 華雨樂雲の願成就 二六〇
 (1) 天香にて満てる雲天華を降らし天樂を奏す 二六〇

(七) 大衆莊嚴功德成就(衆生往生成就) 二六〇

第二十四章 必至滅度の願成就 二六〇
 (1) 彼等は總て正しき位に於て定めらる 二六一

第二十五章 安樂世界の功德讚嘆 二六三
 (1) 世尊伽陀を説く 二六三
 (2) 一、安樂世界の莊嚴を稱讚するとも 二六三
 (3) 二、其の主題は滅し盡きざるべし 二六四
 (4) 三、多くの世界に寶を満たし布施するとも 二六五
 (5) 四、安樂世界の名を聞く福德に比較せられず 二六六
 (6) 五、信は實に安樂世界に到達する根なり 二六七
 (7) 六、無量功德莊嚴安樂世界 二六八

第二十六章 諸佛稱揚、念佛往生の願成就 二六九
 (1) 諸佛世尊無量光如來の名を廣説す、名を聞き深信し念を起すにより不退轉 二六九

第二十七章 上輩段、臨終現前の願成就 二七八
 (1) 善根を殖へ菩提心を廻向し願生せんとする有情如來臨終現前す 二七八

第二十八章 中 輩 段 二八〇
 (1) 憶念と善根無き有情發菩提心により化佛臨終現前す 二八〇

第二十九章 下輩段、植諸徳本の願成就 二八二
 (1) 自棄懈怠なく十念發起願生彼國の有情常に如來を見る 二八二

第三十章 諸菩薩の往詣 二八四
 (1) 如來の名を稱讚し功德を廣説す 二八四
 (2) 諸菩薩安樂世界に来る 二八七

第三十一章 往 觀 偈 二八七
 生尊貴家、具足徳本、住定敬佛、隨意聞法の願成就 二八八
 (1) 世尊伽陀を説く 二八八

(2) 一、恒河沙の數に等しき佛國……………二八八

(3) 二、花聚を無量壽世尊に散華す……………二八九

(4) 三、諸菩薩四維上下より來る……………二八九

(5) 四、香聚を無量壽世尊に散華す……………二九〇

(6) 五、佛國は不思議に輝けり……………二九〇

(7) 六、人の導師に願を奏す……………二九一

(8) 七、花は傘となり佛の上を蔽ふ……………二九二

(9) 八、菩薩は是の如く言へり……………二九二

(10) 九、利益を容易に得たり……………二九三

(11) 十、見よ佛の最勝なる福德聚を……………二九四

(12) 十一、無量壽世尊は微笑せり……………二九五

(13) 十二、光線は再び世尊の頂に歸る……………二九五

(14) 十三、觀自在は立上りて問へり……………二九六

(15) 十四、世尊よ授記し給へ……………二九八

(16) 十五、有情は歡喜を生じ其の國を見る……………二九九

(17) 十六、速に神通力を得ん……………二九九

(18) 十七、聞名の有情を永久に我國に到らしむ……………三〇〇

(19) 十八、我が宿願は満足せり……………三〇二

(20) 十九、我が國土もかくなして衆生を解脱せん……………三〇二

(21) 二十、千億諸佛を供養せん……………三〇三

(22) 二十一、安樂國土に歸り來らん……………三〇三

第三十二章 見道場樹、諸根具足、得不退轉、聞名得忍、得三

法忍の願成就

(1) 菩提樹は高さ千由旬あり一切の寶にて飾らる……………三〇四

(2) 菩提樹の聲を聞く時は五根の疾なく錯亂の心なし……………三〇九

(3) 菩提樹を見て不退轉に住し三種の忍を得……………三一〇

(八) 菩薩莊嚴功德成就(衆生往生の果徳)

第三十三章 一生補處の願成就……………三一三

(1) 菩薩は皆一生補處なる可し……………三一四

第三十四章 聖衆の光明……………三一四

(1) 聲聞は一尋の光菩薩は百千由旬觀音勢至は無限の光……………三一四

第三十五章 三十二相の願成就……………三一七

(1) 諸菩薩は皆三十二丈夫相を具有す……………三二七

第三十六章 不更惡趣、宿命智通の願成就……………三一九

(1) 諸菩薩は佛を見ることを失はず宿命智を有す……………三一九

第三十七章 供養諸佛、供具如意の願成就……………三二三

(1) 諸菩薩晨朝の間に他方諸佛を敬禮するに供具諸願に應じて現はる……………三二三

(2) 種々の天華心の起ると共に現れて諸佛に散す……………三二四

(3) 快感と歡喜を得再び安樂世界へ歸る……………三二五

第三十八章 說一切智、漏盡智通、天眼智通、得辯才智、住定

見佛、那羅延身、人天致敬の願成就……………三二六

(1) 一切智を供へる法話を述べ執着の想無し……………三二六

(2) 肉眼は分了し天眼は出現せり……………三二九

(3) 語源より解説する辯才に熟達し無根に住して難解の佛智に深入す……………三三三

(4) 善く載せて散亂せず曲らぬ根官を有す……………三三八

(5) 解脫自由にして共に居住するに快樂……………三四五

(6) 有情に就ての略說にして廣說せば百千億那由他劫よく盡くさす……………三四七

(九) 釋迦世尊一切道俗勸發……………三四九

第三十九章 阿難陀の見佛……………三四九

- (1) 阿難陀よ投地禮して西方に向へ……………三五〇
- (2) 阿難無量光如來及び諸菩薩を見んことを願ふ……………三五二
- (3) 無量光如來大光明を放つ……………三五二
- (4) 大地が唯一つの海となりてあるのみ……………三五四
- (5) 他の何等の記號又は相なし……………三五七

第四十章 無能勝菩薩の見土……………三五八

- (1) 無能勝佛國の功德莊嚴を見る……………三五八
- (2) 不死の鳥を見る……………三六一
- (3) 諸有情空中に住居するを見る……………三六二
- (4) 天と人との相違なし……………三六三
- (5) 蓮華の胎中に坐せるを見る……………三六三

第四十一章 胎化二生の因縁と信疑の得失……………三六五

- (1) 蓮華の内と自然化生は何の因縁によるや……………三六五
- (2) 狐疑と深信の別……………三六七

(3) 小量の智慧者は五百歳佛を見ず……………三七二

(4) 牢獄の王子は享樂大なりや……………三七三

(5) 王子は唯解脱を願ふのみ……………三七六

(6) 疑惑の諸菩薩は園林天宮の思あるも樂しみ無し……………三七七

(7) 一切疑惑の罪は完全なる損失をなす……………三八一

第四十二章 十方諸國の往生者

……………三八四

(1) この佛國よりの往生者……………三八五

(2) 難忍如來乃至神通力如來國の往生者……………三八六

(3) 花幢如來國の往生者……………三八八

(4) 火王如來國の往生者……………三八九

(5) 到無畏如來國の往生者……………三八九

三、流通分

……………三九一

第四十三章 釋迦世尊無能勝にこの法門を付屬す

……………三九一

(1) 如來の名を聞くより容易に大利を得……………三九一

(2) この法門を開示宣説し書寫執持し諸有情を不退轉に安住せしむる義務……………三九三

(3) 未來の時に於てこの廣大法門により絶大の利益を得……………三九六

(4) 讀誦し誦念し學習し開示し書寫供養によりて功德を増上す……………三九九

(5) 如來の成すべきは成し終る……………四〇〇

(6) 佛法を滅没せしめざらん爲め修習し成就せよ……………四〇二

第四十四章 無着無礙の佛智を信心し精進せよ

……………四〇五

(1) 世尊偈陀を説く……………四〇五

(2) 一、勇者はこの法を聞くことを得……………四〇六

(3) 二、光明を作る者を見ることを得……………四〇六

(4) 三、懈怠邪見者は清淨心無し……………四〇六

(5) 四、一切有情は佛智を知らず……………四〇七

(6) 五、佛は實に佛の功德を知る……………四〇七

(7) 六、佛の功德は説く能はず……………四〇八

(8) 七、勝者の智は不可思議なり……………四〇八

(9) 八、博聞智者は信心す……………四〇九

(10) 九、信心の義理の智慧は長時間……………四〇九

(11) 十、最勝の法を聞いて歡喜憶念す……………四一〇

第四十五章 得益分

……………四一〇

(1) 得益の有情……………四一〇

目次

第四十六章 現瑞 四一二

(1) 六種に震動し神變現れ大地は莊嚴す 四一二

第四十七章 大衆同喜 四一三

(1) 諸菩薩諸聲聞等世尊の所説を歡喜す 四一三

(2) 經題 四一三

目次終

無量光如來安樂莊嚴經講話



總論

大谷光瑞述

元來光壽會の事業と致しまして、ほんけつ翻經といふことが主意と成つて居りますことは、皆さんもよく御承知の所でございます。就きまして此の經典を選びました理由は、大部分の人が信仰をして居る經典であるといふこと、私も従来より讀んだこともあり、自分の力にも適應してゐると云ふやうな次第からでございます。

是の經典はかやうに譯やくしてみますと、頗る易いやうでございますが、原本の非常に六ヶ敷いものでございまして、其の一二割は分つても、後の八九割はどうも分かりま

せん。私は以前一度讀んだことがございます。今度も亦一通り讀んだのでございますが、而かし未だどうも充分に分かりません。露西亞の梵語の大家であるミノロフ博士は、成程文法にかけては大家でもございませうが、このテオロギイとなりますと、充分とは申されません。矢張り不完全でございませう。其處にまゐりますと、多少なりとお經を讀んだ我々の方が、大分確かでございませう。

此の經典は随分長いものでございますから、到底一日で済ますことは不可能でございます。それで七日に互つて講説することに致しました。毎日二時間宛で都合十四時間終るわけでありませう。今日はその七分の一を申し上げることに致します。

私がこの經典を譯し初めましたのは、本年の三四月頃であります。其の後大連の方に参りますし、歸つてからまたすぐ南洋の方へ参りましたので、南洋から歸つて充分やるつもりでございましたが、何分忽卒そつのことでございましたので、譯やくもほんの荒こなしで、文字の使ひ分けも、決して適切と申されません。充分修正を致さなければならぬのでありますが、完全になるのを待つて戴くまでには、どうしても來年の二二三

月位になりますので、荒こなしの儘の稿本に依つて、御説明申し上げます。

此の稿は何分未完全のものでございますから、書籍に致しますには、頗る差し支へるのでございますが、唯私の稿本として御参考下さいませうには宜ろしうございます。私にもう少し梵語ぼんごの學力がございましたら、今少し完全なこなしが出来るのでございますが、私の英語の力と同じ様な程度なので、どうも六ヶ敷うございます。極く微細なことに就きましては、また追つて文字の修正を致す心算でございませう。その時は少し變つた意味となるかも知れませんが、兎に角充分完全なものに成るまでには、もう二三年待つて戴かねばなりません。

此の經典は比較的古く支那しなに傳つてゐます。後漢ごかんの時と云ふ説もあり、或は三國魏こくぎの時代とも云うてゐます。又西晉さいしんの時代に入つたといふ説もあるやうです。どうも後漢かんの時は違ふやうでございませう。三國魏こくぎの時と云ふのが正確のやうでございませう。原本も幾通りもございませうが、その支那譯しなやくには十二譯じふにやくございました。然しそれらの中、兵燹へんせんにかゝつたり、損害を被つたりして、結局五つ存して、七つ缺くに至りまし

た。その五譯の中でも、二譯は原本と全然相異して居ります。或は二つの違つた原本があつたのだらうかと疑はれるのでありますが、どうも私も判断に苦しむところがございます。後の三本は、その中の一つが、稍々異なるやうですが、大體類似致して居ります。支那譯の五存と七缺は次の如きものでございます。

五 存

- 一、佛說無量清淨平等覺經四卷 後漢支婁迦讖譯
- 二、佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經二卷 吳支謙譯
- 三、佛說無量壽經二卷 魏康僧鎧譯
- 四、無量壽如來會二卷（大寶積經卷十七十八） 唐菩提流志譯
- 五、佛說大乘無量壽莊嚴經三卷 宋法賢譯

七 缺

- 一、佛說無量壽經二卷 後漢安正高譯
- 二、佛說無量清淨平等覺經二卷 魏白延譯

- 三、佛說無量壽經二卷 西晉竺法護譯
- 四、佛說無量壽至眞等正覺經一卷 東晉竺法力譯
- 五、新無量壽經二卷 東晉佛陀跋陀羅譯
- 六、新無量壽經二卷 宋寶雲譯
- 七、無量壽經二卷 宋求那跋陀羅譯

今の原本と残つて居ります五譯中、菩提流志譯とが九割方類似してゐますので、私はそれを羅針盤としてやつて居ります。今一つは西藏譯で、これは青木君が西藏に在留の節、大僧正から直接教授せられたもので、同じくこれも羅針盤としてやつてゐるのでございます。斯く菩提流志譯と西藏との二譯を、最も有力なる羅針盤とし、據としてやつて居ります。

又今から四五十年程以前に、オックスフォード大學教授のマクスミューラルと、日本の南條文雄博士と協力で英譯せられたのがあります。又南條博士は英譯を參照して和譯を出されて居ります。原本は同一のものでありますが、文字は多少違つて來て居り

ます。

全體お經と申しますものは、釋迦世尊しやかせそんの說法を、阿難尊者あなんそんじやが直接佛ぶつから耳にした通り、あの偉い記憶の力で覚えてゐたものを、結集けつじゆうしたので、最も正確なものであります。それが、それを其の後筆記し轉寫したものは、どんな小僧だつたか知れやしません。それで少しづつ、の相違が出て來たのでございませう。

英譯えいやくの方は、英語といふものが、大變粗末な、不完全な文法でありますから、初めから私はこれを餘りあてに致して居りません。然し西藏語ちやうつごの方は、もとく、西藏語ちやうつごといふものが、サンスクリットの文法を、ごそつと根こそぎに、輸入したものでございませうから、最も正確で便利でございませう。

全力をつくして印度ひन्दや尼波羅地方ねばろを捜しましたら、まだく、色々な原本が発見されて、随分な數に上ることでありませうし、三百や四百の異つたのもあることとせう。其の中には又違つたこの經の梵本ぼんほんもあると思ひます。私も二つの原本を持つてゐます。これを常に使用致して居ります。

經典と云ふものは非常に尊いものでございまして、一字一句たりとも忽おろそかに取扱ふことは出来ません。それでありませうからこの翻經ほんけうと云ふことは、大變な難事業なのでございませう。譯する言葉に忠實ならんとすれば、原文に不忠實と成り、原文に忠實ならんとすれば、却つて譯文やくぶんに不忠實に成ると云ふやうな始末で、私も随分骨を折つて譯したのですが、まだどうも充分と申されません。私は成るべく原文に忠實に譯出致しましたので、邦文としては面白からぬ點もございませうが、文字は追つて修正することに致します。

本文に入る前に、ちよつと申し上げておきます。都て經典と申しますものは、——經典に限らず何でもさうなのでございませうが、——殊に經典となりますと、

序じよ分ぶん
正せい宗そう分ぶん
流りゆう通つう分ぶん

とこの三つに區分せられてあります。我々のやうな詰らない文章でも、序論じよろん、本文ほんぶん、

結論と大體この三つの分け方を致してゐます。お經になりますと、序分、正宗分、流通分と三つに區分せられるのでございますが、最後の流通分は結論でございまして、今までかく／＼と説いたのを、廣く後世の者に傳へる必要の爲めに書いたものでございます。我々の文に於ては、こんな必要もございませんが、尊貴な經典と成りますと、これが是非とも必要な形式であり、何れも完全に具備してゐるのでございます。

此の經典は大體章に分けますと、四十七章と成ります。第一章から第二章までが序分で、第三章から第四十二章までが正宗分、第四十三章から第四十七章までが流通分でございます。

今日の處は先づ七章までの講義を申し上げること、しまして、以下四十章は、日を追うて順に講義を申し上げます。上に述べました通り、第一章と第二章とが、此の經典の序分となつてゐるのでありますが、菩提流志譯の序分は非常に長いものであり、且又サンガバルマン譯の方の序分も長うございますが、然し原本の方は序分の四分の三ほどが缺けて居りますので、四分の一ほどがこれらの支那譯と類似して居ります。兎

に角序分のところは、三國魏のサンガバルマン譯は、菩提流志譯に似て居ります。全體序分のみならずサンガバルマンの譯文は、古體を帯びて居りますので、支那文としては結構でございますが、原文に遠うございます。然し、菩提流志の譯文は、支那文としては宜しくありませんが、原文に近い様に存じます。

今申し上げました様に私の原本には、第一章の大部分が缺けて無いのでありますが、又西藏文の方にも缺けて居ります。支那に將來された原本では、唐の時代頃には有つたものに違ひございませんが、其の後年代が推移致しまして、宋時代には既に無くなつて居たらしくございます。序分の中でも第二章の方は、只今所有の原本にも、完全にございまして、只その第一章の大部分が缺けて居るのでございます。

要するに此の序分と云ふものは、説法を聽いてゐた聽衆は、大變に偉い人であつたと云ふことを説いたもので、即ち聽衆の資格を論じたのであります。全體序分の第一章と第二章とは、何を申すのかと云ひますと、此の經を説かれるときの必要なり、或は其の順序なりを指示したもので、即ちこの經の順序因縁であり、全經文の前提を

なすものでございます。

正宗分は即ち本文でございます。

流通分はどう云ふ事かと申し上げますと、先にもちよつと申し上げたのでありましたが、要するに此の經典は、非常に大切なもので、一切の生物は、この經典に依つて、救済を受け、これに依つて、他をも濟度し得る能力を賦與せられる。つまり自利利他と云ふことから、後世の者等に廣く知らしめる必要を説いたものでございます。尙この流通分に就いては、第七回目あたりの講演になるだらうと存じます。

都て物には特色と云ふものがありますが、此の經の特色は、一體何處にあるのかと申し上げますと、原理を説いたものでなくして、應用を説いた點にあります。光壽會員のお方々には、原理に就きましては、先般佛教の原理と題して、色々お話し申し上げます。また通り、原理と申すものは、細かな四角張つた理論から成つてゐるものでございます。而してこの經は應用を説かんが爲めの經であるが、應用とは一體どんな意味であるかと申し上げますと、無上正徧知に到達するには、どうしたら到達することが出來

るのかと云ふ、其の方法が説いてあるのでございます。例へば日本へ行かんと思へば、船によらねばなりません。將來は飛行機と云ふもので、空中を飛翔して到達できる様になり、水を掻く世話が省けるかも知れませんが、何れにもせよ何かの應用をまたねば、彼岸に到達は出來ません。昨日の長崎丸の様に、エンジンに故障を起し、舵機を破損したために、未だ入港しないと云ふ様では、完全な應用とは申されません。又同じ達するのにも遅いか速いかの、つまり遅速の度合がございませす。一萬圓の貯金を思ひ立つて、一錢宛貯へて行く様では、百萬年たつてやつと所用の額に達する位であります。同じ一萬圓の金でも、ごそつと貰へるのでありますから、早くこれほどよい事はあります。私共はこの方が大賛成でありまして、遅いのは感心致しません。それでありませすから、應用にはこの迅速と云ふことが伴ふてこなければなりません。

次は正確と云ふ事であります。確かに彼岸に到達出來ると云ふ、確實性を持つてゐなければなりません。此處らのお方々は、競馬の馬券をお買ひ遊ばして、廿五萬圓一攫の夢を見ておいでの方もありますが、これなどは頗る不正確でありまして、私共は

こんな事は大嫌ひでございます。

同じ物を貰ふのでも、「貰ふたい」と云ふ過去になりますと宜敷うございますが、「貰ふ」と云ふ未來の奴は、一向感服致されません。

此の經典の特色は、以上申し上げました様に、迅速正確なる點にあるので、これがこの經典の眞價ある所でございます。釋迦世尊一代の説法中、應用を説いた點に於いては、この經の右に出づるものは無いのであります。正確に而かも迅速に無上正徧知に至ることが出来る。これが大乘佛敎中應用を第一位に置く所以でございます。

全體此の經典は、應用を主として説いてありますが、その重大な原理は、應用中に含まれて居ります。例へばあの寫眞機でございます。皿をくるくると廻し、どろどろした液をかけてやると寫眞が出る。コダックでしたら瞬間の中に寫つてしまひます。而し其の原理に至りましたら、恐らく此の中において遊ばす、皆様方にもお解りはございますまい。私共はとても解りません。それほど原理と申すものは六ヶ敷いものでござります。

其處で應用の方法手段から、原理の謂れを調べ出しますに就て、古來支那に於ける非常な大學者と云はれた人でも、讀み損こねをやつてゐます。先達長岡氏が水銀から金をとる方法を發明しましたが、成程水銀から金もとれませう。而しこの原理を發見するまで、どれだけの苦心がいつたか知れませんが、字の通り讀むことは容易なことではございますが、いざ原理となりますと、仲々六ヶ敷いものでございます。應用方法の速かにして、且つ完全なるもの程、其の原理は却つて非常に難しいものです。コダック寫眞機でも Only press button とあるから、ボタンを押せば寫眞は寫りますが、偕てオプティカル(光學上)からレンズ云々光線云々の原理を知つてゐる人は、殆んど無い様に、此の經でも應用方法は完全にして、且つ迅速であります。原理が仲々六ヶ敷いございます。故に原理を見究めるのに就いて、古來支那の大學者が、讀み損ねた所以でございます。

この經典は我が眞宗の根本聖典でございますして、他力眞宗の敎理は、この經典によつて、實に他力本願の宗致を遺憾なくあらはして居ります。別に淨土眞宗正依の聖典

として、觀無量壽經と阿彌陀經がございますが、如來淨土の因を説き、衆生往生の因を明かにし、阿彌陀如來威神力の緣により、一切の生類皆悉く、無上正徧知を獲得し、清淨佛國嚴飾莊嚴を攝受し、大なる利益を得るに、最速最易の方法を顯示したものは、實にこの經典でございます。釋迦世尊畢波羅樹下の成道より、娑羅雙樹林に於ける入滅まで、一代大約五十年間の説法は、遂にこの經典に歸結して、眞如一實の大道を開示せられた眞實教でございます。從來この經典は、大無量壽經として、一般に知られて居りますが、原典の題號とはちよつと相違して居ります。この原語は、Amit-ābhāsa Tathāgatasya Sukhāvati-Vyūha Nāma Mahāyāna Sūtram と云ふこと、これを直譯致しますと、無量光如來の安樂莊嚴と名づくる大乘經典と云ふことになります。Amitābhā は Amita (無量) と、ābhā (光明) の二字で、限量なき光明と云ふことと云ふ事。Tathāgata は Tathā (如) と、āgata (來る) で、眞如の中を來往する意となります。即ち常住不變のものが如來であります。Sukāvati は Suka (樂)

と、Vati (所有する) で、安樂となります。南條博士は直譯して、樂有と出されて居ります。支那譯は極樂となつて居ります。引いて日本でも昔から、極樂で通つて居りました。極樂と云へば誰でも知つて居ります。私はこれを安樂と譯しました。支那の譯家中にも安樂と譯して居るものもあり、曇鸞大師や親鸞聖人も、安樂と云ふ文字で表はされて居ります。これは直譯ではございませぬが、この場合安樂と致すのが一番宜ろしいと思ひます。Vyūha は莊嚴と云ふ文字です。これは聚合とか塊とかの義で、つまり安樂の塊と云ふことになります。Nāma は名づける。Mahāyāna は大乘。Sūtram は經典。それで私はこれを無量光如來安樂莊嚴經と致しましたが、結局佛說無量壽經と申すのと同じ意でございます。

如來とは、阿彌陀如來のことであり、安樂淨土の如來の別號でございます。又この如來を無量壽如來とも申します。壽命の長遠にして、思量すべからざる義で、この二つは大願業力と善住持力とをあらはし、この大威力に依つて、三世を通じ、上は補處の大士から、下は我々凡夫まで、餘すことなく、齊しく信樂を廻施して、無上涅槃を

超證せしめるのでございます。それで佛名を以て經體を表はして居ります。

この經は忍界の化主釋迦世尊が、大寂定に住してお説きなされたもので、正しく本佛の自説であり、方便假門隨他意の説法ではございません。特妙殊勝の隨自意説法でございまして、釋迦出世の大事因縁であり、一切の菩薩行化の本懷經でございまして。これから本文に這入つて、章を逐ふて御説明申し上げますが、梵文原典には、最初に歸敬文と頌文があつて、三寶に歸命し、無量光如來の哀愍に由つて、摩尼珠寶の充満せる、安樂世界に往生せんことが、誓はれて居りますが、私はこれを省きました。

本文解説

一、序分

第一章 證信序

(1. 2) 六事成就

是ノ如ク我ハ聞ケリ。

一時、世尊ハ王舎(城)鷲峯山ニ於テ住シ、

參萬貳千ノ大比丘衆ト俱ナヘリ。

「是ノ如ク我ハ聞ケリ」と云ふのは、日本語の様な日本語でないやうな譯でございまして、これでも日本語に近い様に、私が直したもので、原文では *Evam mayā grutain*、即ち「斯くの如く我に依りて、聞かれたり。」と書かれてあります。直譯致しますと、こんな六ヶ敷く申さねばなりませんので、分かり易い様に訂正致したものでございまして。

この如是我聞の四字は非常に大切な文字でございまして、一切の經典の頭首に、必ず書かれてある文字で、全經典は實にこの文字によつて傳はるものであります。而し船若波羅密多心經のみに、是れを缺いで居るのでございますが、それは簡明を尊ぶためで、もう一つ長い方の般若心經には、明かに書かれてあります。

是れはどう云ふ意味であるかと申しますと、序分にも二た通りの區分がございまして

て、**證信序**と**發起序**とがそれぞれでございます。證信と申しますのは、**證據**と**信用**との事でございます。發起の方は引き起すものでございます。序分には**證信序**が初めにあつて、次に**發起序**が参ります。この第一章が即ち**證信序**でございます。第二章が**發起序**でございます。都ての商賣に於きましても、**證據**と**信用**といふものがなければ駄目であります。銀行など殊に金の取引の甚だしい所では、往々手形不渡と云ふ様な事があるのも、是れを缺くからでございます。例へば預金をして居らずに、手形を幾ら書いても、其れは不渡となりますし、幾ら預金をしてゐても、西洋ではサイン、日本では捺印がなければ、預金を引出す譯にも参りません。故に**信用**と**證據**と、二つとも重要なる譯であります。

偕て此の**信用證據**と申しましても、六つの事柄でございまして、初めて本當の**信用**が置けるのであります。而してこの六つの事柄と云ふのは、一體何であるかと申しますと、それは**信**、**聞**、**時**、**主**、**處**、**衆**の六つでございます。これを六事成就と申します。この序分では六つの條件にどれが相當するかと申しますと、

- 一、**信**、是ノ如ク
- 二、**聞**、我ハ聞ケリ
- 三、**時**、一時
- 四、**主**、**世尊**
- 五、**處**、**王舍城鷲峯山**
- 六、**衆**、**參萬貳千ノ大比丘衆ト慈氏ヲ首トセル諸菩薩大士**

以上の様になるのでございまして、第一の**信**は是くの如くつまり眞實の意を表はしてゐるのであります。ちようど銀行に於ける、Duplicate(複寫)でございまして、original(原文)のものと異つてゐないものでございます。又あなた方の商業用にお使ひ遊ばす、Copy(寫し)の様なもの、**信**の置ける物件でございまして、

全體經典と申しますものは、**釋迦世尊**の說法なされたものでございしますが、**釋迦世尊**自身で、お書きなされたものではございませぬ。その從弟に當ります**阿難陀**等が、**結集**なされたものでございまして。この**阿難陀**と云ふ人は、**始終釋迦世尊**に**近侍**し

てゐた人でございまして、非常に耳のよい、記憶力の強いお方であつたのです。この人が耳に直接入れた説法を、結集なされたので、自分はおかしく釋迦世尊から承つたと云ふ意味でございまして、釋迦世尊の説法と違つていないのだと、證據立てたもので、「如是」は信成就であり、「我聞」は聞成就でございまして。

この場合はオリヂナルが釋迦世尊で、デユプリケートが阿難陀でございまして。だから信用が置けるのでございまして。

其の次は「時」であります。これは一時、つまり或時と云ふ位の意味で、時成就でございまして。曆日は書いてございませぬ。原文には Ekasmin samaye と出て居ります。經に依りますと、曆のあるのもある様でございまして、要するにそうした時があつたに違ひないのでございまして。

次は「主」でこれは主成就、つまり説き手でございまして、釋迦世尊でございまして。

次に「處」であります。苟くも地球上の出來事である以上、何處か所がなからねばなりません。此處では王舍城鷲峯山で、處成就でございまして。

次は「衆」で、これは聽き手の方で、つまり三萬二千の大比丘衆と慈氏を首とせる諸菩薩大士で、衆成就でございまして。

(3) 説法會坐の長老大聲聞の徳

一切、阿羅漢ニシテ、諸漏ヲ滅シ、無諸煩惱ノ所住ヲ有シ、

正智善解脫心ニ依リテ生繫全ク滅シ、自己ノ希望ヲ達シ、勝利ヲ有シ、最上ノ調

御ト寂靜ニ到達シ、善解脫心、解脫智、大龍、六神通、自在力、八解脫、禪定力

ニ到達シ、世ニ識ラレタル長老、大聲聞ナリ。

この一節は、三萬二千の大比丘衆の資格を説いたものでありまして、比丘と申しますのは、原語で Bhikkhu と申します。即ち出家の男子の事でございます。家もなく、家財道具もなく、他人の供養に依つて生活し、修行してゐる者のことでございます。是れと同じ女子の出家は、別に Bhikkhuni を以て表はします。

「阿羅漢」これは原語を arhat と申しますが、非常に翻譯の六ヶ敷い文字であります。支那では、阿羅漢の文字を以て、之れに當て居ります。これが比丘の智慧最勝

の人でございました。一切の大比丘は、既に阿羅漢果に到達したもばかり、即ち阿羅漢の能力あるもばかりだつたと云ふのでございます。

次に「諸漏ヲ滅ス」とありますが、この諸漏と云ふのがまた面白い字で、難解でございますから、ちよつと御説明申します。原字を *estava* と申します。はは接頭詞でございますまして、向ふと云ふ意味を持つて居ります。 *srava* には a drop, flow, stream と云ふ様な意味がございます。水が流れるとか、門を開いて水を流すと云ふ様な意味になるのでございます。菩提流志はまことに都合よく漏と譯してあります。此處が西洋の人々には解し難いところでございます。總べて漏の附く字には碌なものがございます。脱漏とか、粗漏とか遺漏とか、皆んなザルの中に水を入れる様なものでございます。重箱の如く完全にして、漏れないものでなければなりません。

「無諸煩惱ノ所住ヲ有シ」とは、煩惱がないと云ふことであらうです。此の *Klaga* (煩惱) にも色々なのがございます。物事にぶつかつて、正確な判断が出来ないところから、煩悶し、戀愛とか云つて馬鹿な事に、煩悶するのがあり、その爲めに首を縊

つたり、水の中に投身したりする人もありますが、こんな馬鹿な事は、私共は決して致しません。その外金に煩悶するのがある、生活に煩悶するのがある、擧げれば数知れない澤山なものになります。要するにかやうな煩悶を、一切征服することが、無諸煩惱の諸住を有すと云ふことでございます。

「正智」は文字の通り正しい智識を申します。

「善解脱」と云ふのは、原語を *suvimukta citta* と申します。 *mukta* と云ふのは、今の言葉で申し上げますと、自由解放の意味でございます。所が今日の自由解放と云ふのは、頗る不自由不解放の様でございます。 *su* は接頭詞でございますまして、善とか、容易とか示ふやうな字義でありまして、英語の *Well, good, excellent, perfect* などに相當致します。

「生繫」この言葉は佛教以外では餘り用ゐて居りません。これは、「ヒツカカリ」の事でございます。つまり生死などの、「ヒツカカリ」を云ふたのでございます。生れたものは必ず死ぬるのでございます。だから世間で子供の生れた時などには、「あなたの子

供さんはお生れ成されたが、聽てまた死なねばなりません。御不幸なことです、御同情申し上げます。」と云はねばなりませんところであります。全體世間では、死と云ふことは、大變悲しいこと、嫌なことのやうに思はれてゐるのですが、これは當り前のことなのでございます。生れたものが死ぬる、其處には、ちよつとも不合理な事はございませぬ。而しこんなことを、餘り大きい聲を擧げて云ふのは、工合が悪うございませぬから、この位にしておきます。

次に「調御」と云ふのは、馬の調御と同じものでございまして、Tameの意でございませぬ。よく飼ひ馴らされた馬は、足を揚げさそうとすれば、すぐ足を揚げる。走らそうとすれば、よく走ります。馬ばかりでなく人間でも、よく調御されてゐないのは困つたものです。私の様なのは、頗る調御されて居らんでございませぬ。聖人は物に凝滞せず、世と共に移るとか申しませぬが、これで無いといけません。屈原の様な人は「滄浪の水濁れば我が足を洗ふべく、滄浪の水清ければ我纓を濯ふべし」の要領で、世渡りせねばならないのに、世と容れず、石を掴み損ふて、砂を抱いて、汨羅に投じて死んだので

ありますが、これ等は頗る調御せられて居らなかつた一例でございませぬ。

次に「寂靜」原語を *Śānti* と申しまして、靜かにおつとりしてゐることでありませぬ。

「大龍」は原語を *Nāga* と申します。蛇のことでありませぬが、支那の龍の様に足があつて、蜥蜴のやうなのは違ひまして、印度ではつまり八岐の大蛇の様な澤山な頭を持つてゐる奴つのでございませぬ。又これを象とも譯しますが、何れにせよ動物中の尊いものであることを表はしてゐるのでございませぬ。

「六神通」と申しますのは、次に記載致しますと、

- 一、天眼通 (*Dīvyai-cakṣuḥ*) (神の眼力)
- 二、天耳通 (*Dīvyai-śrotraiḥ*) (神の聴劍)
- 三、他心通 (*Para-citta-jñānam*) (他の心を知る力)
- 四、宿命通 (*Pūva-nivāsānasmṛti-jñānam*) (宿世の境遇を追念する智)
- 五、如意通 (*Riddhi-vidhi-jñānam*) (神變の方法を知る智)
- 六、漏神通 (*Āgrava-kṣaya-jñānam*) (諸の汚れの盡きて滅びたることを知る)

智)

以上の六つを申します。神通とは、これら六つのものに自在なる通力であります。「入解脱」と云ふのは、六神通と同じ様なもので、左に掲げますと、

- 一、内有色相外觀色 (Rūpi rūpāni paśyati) (内には色の相あり外には諸の色を観る)
- 二、内無色想外觀色 (Adhyātmanam arūpa-Sañjñi bahirdhā rūpāni paśyati) (内には色の想なく、外には諸の色を観る)
- 三、外觀色青得自在 (Gubham Vimokṣam kāyena sāksātkṛtvopasainpadya viharati) (身を以て、清淨なる解脱を證し得て、具足し遊行す。)
- 四、内無色想、外觀色黄、其光亦黄、彼中得入無邊空處定具足住) (Sa sarvaḥ rūpasañjñānam samatīkramāt pratigha (Prathama)-sañjñānam astāṅgamān nānātva-sañjñānam a-manasi-kārād anantam akāḥam ityākāḡānantyāyatanaṁ upasainpadya viharati) (彼全く色の想を超越し、障礙(第一)の想を泯滅せ

しむるより、種々異なると云へる想を心にせず、これによりて、空は無限なりと云へる、空無限の處境界を、具足して遊行す)

- 五、超一切無邊處入識無邊處定具足住 (Sa sarvaḥ akāḡā nantyāyatanaṁ samatīkramyānantam vijñānam itī vijñānānantyāyatanaṁ upasainpadya viharati) (彼全く空無邊の境界を超越して、識は無邊なりと思ひ、識無邊の境界を、具足して遊行す)

- 六、超一切識無邊處入無所有處定具足住 (Sa sarvaḥ vijñānānantyāyatanaṁ samatīkramya nāsti kimcidity ākincanyāyatanaṁ upasainpadya viharati) (彼全く識無邊の境界を超越して、何物もなしと思ひ、無一物の境界を、具足して遊行す)

- 七、超一切非非想處具足住 (Sa sarvaḥ ākincanyāyatanaṁ samatīkramya naiva-sañjñā-nāsanījñāyatanaṁ upasainpadya viharati) (彼全く無一物の境界を超越して、想もなく、非想もなしと云へる境界を、具足して遊行す)

八、超一切非非想處入滅受想定具足 (Sa sarvago naiva-saṃjñānāsanaṃ jñāyatanaṃ samatīkramaṃ Saṃjñā-vedita-nirodhanī kāyena sākṣātkṛtvopasamipadya viharati) (彼全く非非想の境界を超越して、想と感覺との滅盡を身に證得して、具足して遊行す)

以上の様なもの、事であります。解脱とは解放されることで、これら八個の様に、超越して、身の自由なることであります。六神通にしろ、八解脱にしろ、凡て大乘菩薩の徳を云つたものでありますが、こゝでは諸漏を滅し以下凡て長老、大聲聞の徳を讃嘆したものであります。

「世ニ識ラレタル長老」は讀んで字の通りでございますが、翻譯は仲々六ヶ敷い字でございます。この原字は神通と云ふ文字と同じ文字であります。こゝでは世に知られたると譯さねばなりません。「世に識られたる」と申しますと、例へば總理大臣と云へば加藤高明氏、實業家と云へば澁澤榮一氏の様に、世間に名の高い人の事でございます。長老の長は、長者とか大家とかの意味でございます。無用の長物とか申す場

合の長とは大分違ふのでございます。老は老練とか老熟とかの義でございます。老朽の老ではありません。

「大聲聞」と云ふのは原語を、*Crāvaka* と申します。佛と同時代に居つた人、つまり佛と Contemporary で、直接に佛の説法を聞いた人のことであります。

(4) 長老大聲聞の名

其ノ名ハ下ノ如シ。

- 1、アーチユナータ、カウヌテイニヤ。
- 2、アシユヅツト。
- 3、ヴァーシユバ。
- 4、マハーナーマン。
- 5、ブハドラチツト。
- 6、ヤシヨーデーバ。
- 7、ギマラ。
- 8、スパーフ。
- 9、ブルア、マイトラーヤニートラ。
- 10、ウルギルヴーカーシユヤバ。
- 11、ナディーカーシユヤバ。
- 12、ガヤーカーシユヤバ。
- 13、クマールカーシユヤバ。
- 14、マハーカーシユヤバ。
- 15、シャーリプトラ。
- 16、マハーマウダガリヤーヤナ。
- 17、マハーカウシユトヒラ。
- 18、マハーカプヒラ。
- 19、マハーチユヌダ。
- 20、アニルツダ。
- 21、ナヌデイカ。
- 22、カシユピラ。
- 23、スプフーテイ。
- 24、レーワタ。
- 25、タハテイラヴニカ。
- 26、ヴクラ。
- 27、スヴーガタ。
- 28、アモーダハラージャ。
- 29、パーラーヤニカ。
- 30、カヌトハカ。
- 31、チユルラバヌタカ。
- 32、ナヌダ。
- 33、ラ
- 1フラ。
- 34、具壽阿難陀等ナリキ。此等及び其ノ他ハ神通ヲ以テ世ニ知ラレル長老、

大聲聞ナリ。唯一ノブドガラ具壽阿難陀ノ學地ニ有ルヲ除ク。

つまり世に識られたところの長老や、大聲聞の名が列記してあるのです。

終りの方に「具壽阿難陀」とありますが、この具壽と申しますのは、生命を持つてゐるものの意義でございしますが、此處では大家とか長者とかの義であつて、長老と同意義でございします。徳川幕府時代に、年寄とか若年寄とか云ふ職が御座いましたが、これは、唯職名で、若い年寄りさんと云ふ意味ではございしません。井伊大老の如きは三十何歳の若さを以て大老でありました。これと同じく具壽も長老と同意なのでございします。

その次の「其ノ他ノ神通ヲ以テ知ラレタル長老、大聲聞ナリ」とは、前の文を繰り返して説いてあるのでございします。

次に「唯一のブドガラ」とありますが、このブドガラは、原語を pudgala と申します。これがまた恐ろしい譯の六ヶ敷い字でございまして、あの大學者の玄奘三藏ですら、よう譯し切りませんでした。私も原字の儘音譯して出して居ります。全體支那に

これに相當する文字がございせんのですから致し方ございせん。何とも譯しやうが無いのであります。これには body, object, material, individual. 等の意味を所有してゐまして、體とか、個人とか、人間、我身等の意でございします。それでありますから、度々生れ變り立ち變りする者の、ことであります。この處で「唯一のブドガラ具壽阿難陀ノ學地ニ有ルヲ除ク」と云ふことは、生繋全く滅して居らないところの、ブドガラである阿難陀のみを省くといふことであります。學地と申しますのは、有學で無學といふことに對した言葉であります。無學と申しますのは、學なく智なきことを云ふたのでございせん。「學ばねばならないことを皆んな學び終つて、もう學ぶことが一つも無い。」といふことなのでございします。例へば物を喰べるのに、喰ふものすべてを喰ひ盡くして、皿でも嘗ねばならん時と同一です。皿の中に未だ少し残つてゐるといふのが學地のことで、學問するのに、まだ餘地のあることとございします。要するに未だ阿羅漢に到らない、阿難陀だけを除くと云ふたのでございします。

(5) 說法會坐の菩薩

又、慈氏ヲ上首トセル、多クノ諸菩薩大士ト俱ナヘリ。

「慈氏」と申しますのは、Maitreya-ajita のことでありまして、aya と申しますのは、氏でも姓でもないものであります。これは末尾に附加せられますと、姓を持つてゐるものとなるのでございますから、慈氏と譯されました。

ajita と云ふのは本名なので、これを無能勝とも譯されてゐます。この意味も亦無學と同筆法でありまして、勝つこと能はずではございせん。能く勝つものが無いといふ意味でございます。これから以後原文には、ajita ajita と再參出てまいります。

「上首」と云ふのは、頭の義でございまして、商業會議所の長を、商業會議所會足とは申しません。商業會議所會頭と申します。

「菩薩」と申しますのは、あなた方はもうよく御承知のことだらうと存じます。重ねて申しますれば、無上正徧知に至るべき生物のことでありまして、「大士」と申しますのは、大人の義でございせん。大變に褒めて言つてあるところでございます。

前に比丘と云ふのは、出家のことだと申しましたが、都て小乗の人を指して居り

まして、菩薩や大士は、出家も在家も、皆大乘の人を指すのでございます。菩提流志譯の經典には、出家も在家も、一々名前が列記せられてあります。出家と申しますのは前にも申しました様に、家も無く財も無く、他人の喜捨を待つて、生活してゐる者であります。在家の方には、色々なのがございまして、大金持であるとか、或は大商人であるとか、一様でございせん。こゝは初めに説法の會下に來集の聲聞衆を擧げ、次に大乘菩薩衆を擧げ、これら同聽の大小聖者を列し、尊高を擧げて、卑下を攝したもので、彌陀の大悲は、十方衆生を平等に攝化して、遺すことなきを證したものであります。

第二章 發起序

(1) 阿難陀の請問

爾時、阿難陀ハ、坐ヨリ起チテ、上衣ヲ一ノ肩ニシテ、右ノ膝蓋ヲ地ニ附ケ、世尊ニ、合掌シ、稽首シテ、世尊ニ、此ク言ヘリ。

この文は随分持ち廻つた文でございますが、原文の通りでありますから仕方がございません。上衣を左の肩に掛けて、右の肩を出し、地面に膝をつけて、禮拜をすると言ふのが、即ち印度の貴人尊貴に對する禮でございます。かやうにして世尊に對して申し上げたのでございます。

(2) 如來の現相

世尊ノ諸根ハ悅豫シ給ヘリ。膚色ハ淨潔ニシテ、面色ハ清白ニシテ、黄ナル光アリ。宛モ、秋ノ空ノ青白淨潔ニシテ、黄ナル光アルガ如シ。此クノ如ク、世尊ノ諸根ハ悅豫シ給ヘリ。面色ハ清淨ニシテ、皮膚ハ清潔ニシテ、黄ナル光有リ。世尊ヨ、宛モ、Jambu 河ノ黄金ヲ、巧ナル鍛師及ビ工手ガ、火爐ニ入レ、精鍊シ、青白ノ氈布ノ上ニ出シ、無比淨潔ニシテ、黄光アルガ如ク、正ニ此ノ如ク、世尊ノ諸根ハ悅豫シ、面色ハ淨潔ニシテ、皮膚ノ色ハ清淨黄光アリ。復次ニ世尊ヨ、我ハ曾テ斯克ノ如キ、悅豫セル如來ノ諸根清淨ナル面色、淨潔ナル皮膚ノ色、黄ナル光ヲ見シ事無シ。



第一節は讀んで字の通りでございますが、「秋」の字がちよつと原文には書き違へてありましたから、譯する際甚だ迷惑致しました。ミノロフ博士にも相談致したのでございましたが、兎に角閉口した字です。秋の空と申しますのは、恰度この頃の空で、太陽が新嘉坡の方に、ずつと降つてくれますから、次第に黄色を呈する様になります。それを云つたものでございます。佛の説法遊された王舍城は、北緯二十五度の地位でございまして、臺北地方と殆んど同緯度でございます。それですから、此處ら(上海)の光線とも、餘り相異して居らない筈でございます。今日は幸にお天氣でございますから、皆さん外に出て御覽になれば、直ぐ秋の空の光線が、どんなかお分りになります。世尊の諸根悅豫して、面色が清白で恰度黄な光のある、秋の太陽の様であるといふことでございます。

「諸根」この原字を、Indriya と申します。五根の根のことでありまして、目、鼻、口、耳、身と云ふ様な Organ なのでございます。

次の節に「Jambu 河の黄金」と云ふのがございますが、これは非常に「ミステイカル」

なものでございまして、印度では貴重なもの、一つでございます。白金ではございせんが、砂金の一種で、まあ純金とお考へになれば宜敷うございます。それを巧な鍛冶屋がどろ／＼溶かして、氈布の上に流したときの、黄金の色をいつたものであります。これは日本に行つて、造幣局あたりで、金貨を製造してゐるところでも見たら、これと同じ色合を見届けることが出来ませうが、此處らではちよつと六ヶ敷うございます。世尊の顔面や、皮膚の色は、恰度その様な色だつたと云ふことであります。阿難陀は先きに申し上げました通り、釋迦世尊の從弟に當り、その御入寂まで始終お膝下に昵近してゐましたが、世尊のお顔の、このやうに麗しかつた事を、未だ見た事がなかつたものですから、一體どうした譯なんだらうと、不審を起したのであります。

(3) 佛々相念

我ハ是クノ如ク(思ヘリ)。世尊ヨ、今日如來ニハ、覺者ニ住シ、勝者ニ住シ、一切智ノ位ニ位シ、大龍ニ住シ、今日如來ハ、過去未來現在ノ、如來應正徧知ヲ憶念セリ

ト(思ヘリ)。

これも讀んで字の通りでございますが、今までに説かれた事は、都て姿を讚めたこととございまして、これからは心のことに入るのでございまして。

如來應正徧知と云ふのは、如來十號中の三號でございまして、Tathāgata. arhat. samyak-sambuddha であります。

「今日如來ハ過去未來現在ノ如來應正徧知ヲ憶念セリ」この處は大切な引き起しの場處でございまして、これは一切の如來が世に出て、作すべき義務であるが、世尊も此の義務を作すべく、世に出現せられたのでありませうと問へる所で、四十三章の「誠ニ無能勝ヨ其ノ如來ニ於テ爲サルベキ事ハ我ニヨリテモ成シ終レリ」云々の處と相呼號するものでございまして。この四十三章は十五日の講演に懸るだらうと存じます。

(4) 阿難陀の所問に對する世尊の問

是ノ如ク言ヒシ時、世尊ハ、具壽阿難陀ニ、是ノ如ク言ヘリ。

善哉善哉。阿難陀ヨ、云何が、諸天又ハ諸佛世尊ガ、其ノ義理ヲ汝ニ告ゲシヤ。

或ハ亦汝ノ現在ノ觀察智ヲ以テ、是クノ如ク知リシヤ。
前の問を聞かれて、世尊は、阿難陀に向つて、かくの如く仰せられたのでござい
ます。

「善哉善哉」これは原文には、Sādhu Sādhu と來て居りまして、つまり讚めた言葉
です。非常に此の問が、よかつたものでありますから、世尊は大變に讚嘆せられたの
です。そしてこの問は、お前が發明して云つたのにしては出來すぎだが、果してお前
の觀察智を以て云ふた事か、或は他人の入れ智慧かと仰せに成りました。

(5) 阿難陀の回答

是ノ如ク言ヒシ時、具壽阿難陀ハ、世尊ニ是ノ如ク言ヘリ。世尊ヨ、諸天若クハ
諸佛世尊ガ、此ノ義理ヲ告ゲシニ非ズ。世尊ヨ、今現ニ我ノ觀察智ニ依リテ、此
ノ如ク、今日如來ハ覺者ニ住シ、勝者ニ住シ、一切智ニ住シ、大龍ニ住シ、今日
如來ハ、過去未來現在ノ、諸佛世尊ヲ憶念スト(思ヘリ)。

この一節は讀んで字の如く、この問を起したのは、他人の入れ智慧でも何でも無い。

全く自分の發明に懸るものであります。世尊のお姿を拜するに、どうも謂れがあるら
しいから、御問ひ申し上げた次第であります。と云ふのであります。

(6) 世尊の問意稱嘆と無障碍の慧見

此ノ如ク云ヒシ時、世尊ハ、具壽阿難陀ニ、此ノ如ク云ヘリ。
善哉善哉。阿難陀、實ニ高大ナル汝ノ問ヒ、賢明ナル觀察、優レタル辯才ナリ。
阿難陀ヨ、汝ハ多クノ人ノ利益ノ爲メ、多クノ人ノ幸福ノ爲メ、世間ノ哀愍ノ爲
メ、大ナル民衆ノ利益幸福ノ爲メ、諸天人ノ安樂ノ爲メ、汝ハ如來ニ、此ノ義理
ヲ問フベキ義務アルモノナリト思ヘルナリ。

是ノ如ク阿難陀ヨ、諸世尊如來應正徧知ニ於テ、無量無數ノ慧見ヲ開示スルモ、
如來ノ智慧ハ損害セラレズ。

何ヲ以ツテノ故ニ、如來ノ慧見ハ、無障碍ノ理由ヲ(有セル)慧見ナレバナリ。
兎に角此處はえらい褒めかたがしてございます。我々もこの位褒めて貰ふとよろし
いのですが、仲々罵るものは多くても褒めやうとする者はございません。此の經典の

最も大切なるところの機關力を、引つ張り出したのが、實に阿難陀でございますから、この位な褒詞を被ることは、至當なことなのであります。

この節で六ヶ敷いところは、無障碍の慧見であります。幾らとつてもとつても消滅しないところの、圓滿なる知識だと云ふことでございまして、如來の慧見の偉大なることを云つたものであります。

(7) 如來の諸根は損害なし

阿難陀ヨ、若シ如來ニシテ、願望セバ、一握飯ニテ、一切ノ間、百劫ノ間、千劫ノ間、又ハ百千劫ノ間、又ハ百千億那由他劫ノ間、又ハ其レ以上ニ住スル事ヲ得ベシ。而モ尚ホ如來ノ諸根ハ、決シテ損害セラレザル可ク、顔色ハ決シテ變ズル事無カル可ク、皮膚ノ色ダモ損害セザルベシ。

何ヲ以ツテノ故ニ、是ノ如ク實ニ、阿難陀ヨ、如來ハ三摩地ニ入り、彼岸ニ到達セリ。

この節に「一劫」と申すのがございしますが、これは「一カルバ」のことでありまして、

四十三億二千萬年の長い年數を云ふのであります。それが尙、百カルバ、千カルバ、百千カルバ、百千億萬カルバの間、まだくそれ以上の間と申すのでございますから、まあ滅法もない長い時間、たつた一つの握り飯で生きて居れる。それで決して身體は衰弱せず、顔色も決して衰へず、元の儘だといふのでございします。此處の處は主として如來の能力に就いて、説かれてあるのでございまして、我々の様なものは、二三日も絶食するともう駄目です。そろそろ視力が鈍つてくる、顔色は褪せ、歩行は不可能となりまして、頗る都合が悪うございします。それなら何故に如來にかやうな不思議な能力があるのかと云へば、三摩地に入つて居る、つまり定に入つて彼岸に到達してゐると云ふ點にあるのであります。定に入ると云ふのは、唯今の適切な言葉で申し上げますと、精神統一の極致でございまして、禪宗で小僧さんが坐禪をくんで、こくりくやつてゐるのは、あれは眠り三摩地と云ふ奴でありまして、頗る劣等でございします。彼岸は彼の岸に向ふと云ふのでございしますから、三摩地に到達することを指して居ります。

(8) 如來の出世に値ひ難く大悲の攝受は得難し

阿難陀ヨ、諸正徧知ノ世ニ於テ出ヅル事ハ、甚稀ナリ。猶シ Audumbara ノ花ノ世ニ出ヅル事ニ、値ヒ難キガ如シ。

是ノ如ク、阿難陀ヨ、諸如來ノ利益、福德、哀愍、大悲ヲ受得スル事ノ出現ハ、甚稀ナリ。

Audumbara と申しますのは、樹木の名でございまして、學名を Ficus Glomerata と申します。日本で云ふ「イチヂク」と同じ様なものでありまして、印度ではほんに有りふれた木でございます。また南洋の方に参りました時に、持ち歸りまして、皆様方のお目にお懸けしても宜敷うございます。木は有りふれてゐますが、花が珍らしいので、滅多に見られません。まあ「イチヂク」と思召したら間違はございますまい。日本では「イチヂク」を無花果と申しますが、花が外から見えぬので、かく申すのであります。その珍奇である「アウダンバラ」の花が、世に出る事に値ひ難い様に、諸の正徧知の世に出ることは、珍らしいのだといふ事に成ります。

(9) 如來の義理を説かん

復次ニ阿難陀ヨ、如來ノ威力ニ依リテ、汝ハ一切世間導師タル、諸有情ノ世ニ於テ出現ノ爲メ、諸菩薩大士ノ爲メニ、如來ニ義理ヲ問フ可キ義務アルト思ヘルナリ。此ノ故ニ、阿難陀ヨ、聽キテ、善ク克ク憶持セヨ。我汝ニ説カン。

この一節の文は、前のを受けついで來て居ります。つまり阿難陀よ、お前がこうした問をする義務のあると思ひたつたのは、實に如來の威力に依つたからなのだと云ふこととございます。

この「威力ニ依ル」と云ふ文字は、非常に面白い字でございまして、佛教以外には餘り使はれない字でございます。これはつまり文章の一つの綾でございます。

「諸有情」は Sattva といふをしまして、生物の意義でございます。この字は會員の皆様方には、何遍もお話し致す文字でございますから、よく御承知の事と存じます。

要するに此の一節は、自分は今迄幾多の經典を説いて來たが、つまり唯一つ是の經典を説かんが爲めに出世したのだから、よくよく耳を澄して聽いてくれ。今説き聞か

すからと云ふわけでございます。

(10) 阿難陀世尊に聽受を請ふ

是ノ如シ、世尊ヨ。ト言ヒテ、具壽阿難陀ハ、世尊ニ答ヘリ。

この「是ノ如シ」とは evain と同文字でございます。お仰つた通りを覚えてゐます。どうか説いて下さいお願い致します。と云ふのでございまして、これでこの經典の序分じよぶんが終つたわけでございます。

二、正 宗 分

無量壽如來成道因果

(一) 成道の因——發願

第三章 世間自在王如來と法藏比丘

(1) 宿昔過去の諸佛と世間自在王如來

世尊ハ阿難陀ニ、是ノ如ク告ゲ給ヘリ。

又阿難陀ヨ、宿昔過去ノ時、今ヨリ無數ノ、更ニ無數ノ、廣大無量不可思議劫ノ時ニ於テ、然燈ト稱スル、如來應正徧知ガ世ニ出デキ。

- 1、デーパンカラ。2、プラターパヴツト。3、ブラブハーカラ。4、チアヌダナガヌダ。5、スメールカルバ。6、チアヌダナ。7、ギマラーナナ。8、アヌリプタ。9、ギマラプラバ。10、ナーガフヒフイー。
- 11、スールヨーダヤ。12、ギリラーチアグホーシヤ。13、メールクータ。14、スウルナプラバ。15、チョーテイシユプラバ。16、ヴーイドユールヤニルバーサ。17、ブラフマグホーシヤ。18、チアヌドラフヒフイー。
- 19、スールヤグホーシヤ。20、ムクタクスマプラテイマヌテイタプラバ。21、シユリークータ。22、サーガラヴラブドヒギクリーテイターフヒチユナ。23、ヴラプラバ。24、マハーガヌダラーチアニルバーサ。
- 25、ギヤバガタークヒラマラプラテイグホーシヤ。26、シユラクータ。27、ラナンチアハ。28、マハーグナダラブドヒプラフターフヒチユナ。29、チアヌドラスールヤチフミーカーナ。30、ウツタフタヴイーユールヤニルバーサ。31、チツタダーラフドヒサンクスミターフヒユドガタ。32、プスパーヴテイーヴナラーチアサンクスミターフヒチユナ。33、プスパーカラ。34、ダカチアヌドラ。35、アギデイヤーヌダカールギドゥンヴンサナカラ。36、ロケーヌドラ。37、ムクタチユハツトラアラワータサドリシヤ。38、テイシユヤ。39、ダルママテイギナヌテイタラーチヤ。40、シンハサーガラクータギナヌテイタラーチヤ。41、サー

ガラメルチャヌドラ。42、ブラフマスヴラナーダービナルテイタ。43、クスマサンバヴ。44、プラーブ
 タセーナ。45、チャヌドラパーヌ。46、メルクータ。47、チャヌドラブラバ。48、ギマラネートラ。49、
 ギリラーチャグホーセーシユウラ。50、クスマブラバ。51、クスマヴリーステイヤブヒラキールナ。52、
 ラトナチャヌドラ。53、パーテイヤギーニユバシヨビタ。54、チャヌダナガヌダ。54a、タガラガヌダ。
 55、ラトナーブヒバーサ。56、ニミ。57、マハーギーハ。58、ギヤバガタークヒラドローシヤ。59、ブラフ
 マグホーシヤ。60、サブタラトナーブヒヴリーシユタ。61、マハーグナダラ。62、マハータマーラパットラ
 チャヌダナカルダマ。63、クスマーブヒチユナ。64、アチユナーナギドフヴンサナ。65、ゲーシヤリン。66、
 ムクタチユハットラ。67、スヴルナガルバ。68、ヴーイドユーリヤガルバ。69、マハーケーツ。70、ダルマ
 ケーツ。71、ラトナケーツ。72、ラトナシユリー。73、ローケーヌドラ。74、ナレーヌドラ。75、カールニカ。
 76、ローカヌダラ。77、ブラフマケーツ。78、ダルママテイ。79、シンハ。80、シンハマテイ。

阿難陀ヨ、獅子慧ヨリ、更ニ超ヘテ、世間自在王ト名附ケル、如來、應、正徧知、
 明行足、善逝、世間解、無上、調御丈夫、天人師、佛、世尊ガ出デタリ。

この章から正宗文に入ります。「宿昔」と申しますのは大昔のことであります。一カル
 バを四十三億二千萬年として、それに無数の無数の、も一つ廣大無量不可思議倍だけ

の劫の、昔と申すのでございますから、算用の出来ない程の大昔のことなのでござい
 ませう。その時に然燈如來と申す方がられました。

この然燈如來は、その八十佛名の第一位に掲げられてある、Dipankara と申され
 る方であります。これはランプを作るといふ様な意味の字でございませうから、作
 しても宜敷いのでございます。これから來まして、やはり然燈となつたものでござい
 ませう。支那では錠光又は定光と譯して居ります。なせこんなに昔の如來から、引つ
 張り出さねばならないのかと申しますと、この如來の時に釋迦世尊が、未だ「マナ
 バ」の名であらせられた時、これから後これ／＼の時代に、釋迦如來となつて出世す
 るのだと、お仰せられたのでございます。それで何れの經典にも、この然燈如來を基
 準として出してあるのでございます。以下ずつと八十佛名が載せられてございませうが、
 一つ不審なことには、復次にとありますのが、果して其の名前より舊るく上に上るの
 か、其れから尙新しく下に下るのか、はつきり致しません。どちらでも宜かりそうな
 ものでございますが、古より今日まで、仲々問題にされてゐます。私では何んともお

答へ申し上げられませぬ。

最後の一節の處で、獅子慧の次に如來の十號がだされてあります。如來、應、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上、調御丈夫、天人師、佛、世尊と是れらは、皆智慧の代表詞でございまして、その中、如來、佛、世尊の三つが、普通使用せられて居ります。左に十號の一つ／＼の原語を掲げます。詳しくは佛教の原理を御参照下さい。

- 一、如來 Tathāgata (斯くして來れるもの、斯くして去れるもの)
- 二、應供 Arhat (他の供養に相應するもの)
- 三、等正覺 Samyak-Saṃbuddha (正しく又普ねく覺れるもの)
- 四、明行足 Vidyā-Caraṇa-Saṃpannaḥ (學識と行爲とを具足せるもの)
- 五、善逝 Sugataḥ (よく去れるもの、幸福なるもの)
- 六、世間解 Lokavit (世間を知るもの)
- 七、無上士 Anuttarah (この上なものの)
- 八、調御丈夫 Puruṣa-Daṃya-Sārathiḥ (人の調御せらるべきものを調御する)

御者)

- 九、天人師 Cāstā deva-manuṣyānām (諸天と人とを教ふるもの)
- 十、佛 Jinaḥ (Buddha) (覺めたるもの、悟れるもの)
- 十一、世尊 Loka-jyesthah (Bhagavat) (幸福あるもの榮光あるもの)

右の様になります、十號であるべきものが、十一號となつて、一號増してゐます。これに就いては、昔から色々議論がありますが、二名號を合して一つにしたり、最初の如來だけを別にして、他のものを以て、十號に算へてゐるやうです。それはさてをき十號といふのは、大體右に掲げた様なものであります。

(2) 發願修行の人法藏比丘

復次ニ阿難陀ヨ、彼ノ世間自在王如來應正徧知ノ說法セシ時ニ、法藏ト名ヅクル比丘アリ。殊勝ナル正念精意智慧、殊勝ナル精進、廣大信解ヲ有セリ。

此の節に「法藏ト名ヅクル比丘アリ」とあります。この法藏と申しますのは、原字を Dharmākara と申しまして、法を作ると云ふので、即ち作法の義でございまして。

これも亦翻譯ほんやくしにくい文字でございますが、結局「ダルマ」を藏してゐると云ふ意味でございませう。そして斯う云ふ名前の比丘びくが、大昔、世間自在王如來應正徧知せけんじざいおうせうへんちの説法せる時に、在つたと云ふのでございませう。

第四章 嘆 佛 偈

(1) 法藏比丘偈を説かんとして師佛を敬す

爾ノ時法藏比丘ハ、坐ヨリ起テ上リテ、上衣ヲ一方ノ肩ニシテ、右ノ膝蓋ヲ地ニ付ケ、彼ノ世尊世間自在王如來ヲ、合掌シ、世尊ニ稽首シテ、其時此ニ對シテ、
伽陀ヲ以テ、讚嘆セリ。

元來この正宗分も

(一)無量壽如來成道因果 (二)釋迦如來の勸發

右の二つに區別せられるものでございませう。初めのは成道の原因、及びその結果を云ふのでございませう。後の分は彼處に行け、此處に來いと勸めるものでございませう。

この經典では三章から三十八章までが、成道の因果を説いて居ります。三十九章から四十二章までが、つまり如來の勸發に就いて、書いてあるのでございませう。成道因果の章目を、更に細別致しますると、三章から十章までが、因でございまして、十一章から三十八章までが、果でございませう。因の方でも、三章から十章までは、願を起したものを云ひ、十章は修業を果したことを、説かれたのであります。

伽陀といふのは韻文でございまして、韻がきちん／＼と合つて居ります。支那では詩、日本では歌のごときものであります。印度のは韻を尊んだ爲めに、文法通り出來て居りませんし、時に俗語と雅語とが、混淆したりして居りますので、非常に六ヶ敷うございませう。次節から韻文で表はされてゐます。この節は即ち例の尊貴に對する禮法に依つて、法藏比丘が、合掌し禮拜して、世尊自在王如來を、讚嘆したもので、法藏菩薩が正に大願を建てんとするに當り、偈を以て師佛を讚嘆し、師教を請ひ、所願を啓白するのです。

(2) 一、無量光明他に比類なし

無量光明他ニ比類ナシ、如何ナル他ノ光モ輝カズ。

日ト摩尼聚ト月ノ光モ、一切世間ニ於テ輝カズ。

これは自在王如來の光明を、讚嘆したところの「ガーター」でございます。

「摩尼」と申しますのは、眞珠のことでございまして、ミステイカル、ヒストリイに依りますと、天の眞珠と出てをります。支那で云ふ夜光眞珠とか趙氏連城壁とかに當るもので、大層立派であります。然かし無量の光明の前には、その燦然たる輝きも、太陽の光も月の光も星の瞬も、他の全部の光も、一樣に輝く能力を失ふと云ふ意味でございます。

(3) 二、有情の最勝者色相も亦限なし

有情ノ最勝者色相モ亦限リ無シ。是ノ如ク佛ノ音聲モ、無限ノ響キアリ。戒モ亦定、智慧、精進モ、此ノ世ニ於テハ、他ノ何者モ等シキハナカルベシ。

色相と申しますのは、容姿の意味でございまして、原文には Rūpa と出てをります。これは色といふ文字でございますが、この場合「シキ」で、つまり色相のことであ

りまして、それが限りない。又音聲も限り無い。戒も定智慧精進も、他の何者にも、及ばないのだと云ふことであります。

この戒と申しますのは、法律の事でございまして。定と云ふのは、先きもあつた通りでございまして、精進は勉強であります。つまりこの「ガーター」は、その徳を褒めたものでございます。

(4) 三、深くして廣大精微なる法に達す

深クシテ、宏大ニシテ、精微ナル法ニ達シ。佛ノ最勝ノ心ハ、大海ノ如シ。彼ノ導師ニハ、憍慢(ノ心)ナシ。瞋恚ヲ捨テ、覺リノ岸ニ達セリ。

これは讀んで字の通り別にたいした難句もございませぬ。

(5) 四、佛の威光は一切方に輝く

其ノ佛ノ勝レタル限リ無キ威光ハ、一切ノ方ニ輝ケリ。人帝中ノ王ヨ、是クノ如ク我ハ、佛陀法王ト成リテ、生老死ヨリ解脱セシメン。

この第四偈の半分までは、或は光明の比類なきを云ひ、或は一切方に輝くと云ひて、

如來の威相を讚嘆し、或は音聲の限りなきを云ひて、其の口業を讚嘆し、或は微妙の法に達し、大海の如き最勝の心を持し、戒、定、慧、精進を具足する等其の意業を讚嘆して、佛徳の廣大なるを讚嘆し、人帝中の王よ、以下、法藏菩薩自らの所願を申し上げるのでございます。人帝中の王といふのは、Narendrarajaでございます。King of King 即ち皇帝中の皇帝といふ程の意味であります。

要するに此の「ガーター」の大體の意味は、お褒め申し上げたあなたと同じ様な、佛陀法王と成つて一切のものを生と老衰と死から、解放させたいと云ふことであります。

(6) 五、我は殊勝誓願を起して一切有情を救済せん

布施ト、寂靜ト、戒ト、忍辱ト、精進ト、禪ト、定ト、又最上殊勝誓願ヲ、我ハ起シテ、佛トナリテ、一切有情ヲ救済セン。

布施とか、寂靜とか、戒とか、忍辱とか、精進とか、禪定のみでなく、また特別に勝れた願をば起こして、佛と成り、都ての有情を救済しよう云ふことであります。

(7) 六、一切諸佛を供養して福德最勝の菩提を希ふ

百千億幾多ノ佛ハ、此クノ如ク、又恒河(沙)ノ如ク、無限ナリ。我ハ此ノ一切ノ世尊ヲ供養シテ、福德最勝ノ菩提ヲ希フハ(他ニ)比類ナカラン。

この「ガーター」の中に在る恒河の砂と申しますのは、ガンガ河中の砂といふことでありまして、皆さん方の中に、印度に行つたお方がございましたら、よく御存じのことだらうと思ひますが、この砂は恰度、灰の細い様なのであります。これは「ヒマラヤ」の「マイカシスト」の粉碎したものでございまして、それが「ハルドワール」から「カルカッタ」に至る、一千哩の間連つてをります。その無数の砂を以つて、佛の澤山なることを形容したものでございます。それほど佛を、一つ一つ供養して歩るかねば、ならんでございますから、大變なことでございます。

(8) 七、一切光明を放つ精進力を起さん

恒河ノ砂塵ニ等シキ世界、其レヨリモ更ニ無限無數ノ國土、其レ等ノ所ニ一切光明ヲ放チ、此クノ如キ精進力ヲ起サン。

文字の通りでございます。つまりミンシバルのリバーサイドに於ける、發電力位の

精進力では駄目で、もつともつと偉大な精進力を起こさうと云ふので、光明の徳を言つたものです。

(9) 八、我が國土は廣大最尊第一

我ノ國土ハ、廣大最尊第一ニシテ、此ノ所ノ塵垢有爲ヲ（轉シ）、無等ノ涅槃界ノ快樂ニ、亦有情ヲ、我ニ由リテ、清淨ナラシメン。

「塵垢」と云ふのは、ゴミで、開北邊りに參りますと、隨分アカやらゴミやら有つて、汚くございます。有爲と云ふのは、我々の様なのを云ふのであります。

清淨と申しますると、譬へば湯に這入つて、洗ふ様なことで、綺麗にすることでありすが、此處では自分の國を清淨にすることでありすが。國土廣大最尊第一は、國土功德成就を願つたもので、有情を涅槃界の清淨快樂ならしめんとは、大衆功德成就を願つたものです。

(10) 九、佛よ我の證明たれ

十方ヨリ來集スル、諸ノ有情、其處ニ行キ、我が爲ニ速カニ快樂ヲ得セシム。佛

ヨ、我ノ證明タレ、此ノ目的ヲ達スル事ニ於テ、眞實ノ精進力ヲ起サント願フ。「十方」と申しますのは、支那の四方八方の謂であります。然かしこれは大變淺薄な云ひ廻はしでございますして、「サイエンテイフィク」な考へのある印度人は、中々こんなへまなことを云つてをりません。平面だけでは承知が出来ない。立體即ち上下を加へてゐるのです。それで支那で四方八方とゆくところを、印度では六方十方と云つてをるのでございます。こゝは佛證を請ふ偈でございます。

(11) 十、無礙の智は我が心を了知す

十方ノ世界ヲ知ル無礙ノ智ハ、常ニ我が心ヲ了知ス。無間（地獄）ニ、我ハ常ニ住ムトモ、誓願力ハ、決シテ退轉セザルベシ。

この「ガーター」の要點は勇氣のあることを云つたところでありまして、如何なる苦惱があつても、退轉せず目的を達すると云ふことであります。

「無間」これは八大地獄の一つであります。罪ある衆生は彼の地獄に落ちて、間斷なく苦を受けるので、無間と言つたので、原字は Avici とござります。こゝはつまり十

方佛の證誠を請ひ、併せて、自らの誓願を結んだのでございまして、不退轉の誓願力によつて、初めて永劫の修行を成就するのであります。

第五章 法藏比丘の請説と師佛の説現

(1) 法藏比丘の請説

爾ノ時ニ阿難陀ヨ、法藏比丘ハ、世尊世間自在王如來ニ向ヒテ、此ノ伽陀ヲ以ツテ、稱讚シタル後、次ノ如ク言ヘリ。

世尊ヨ、我ハ無上正徧知ヲ證得セン事ヲ欲ス。復又無上正徧知ニ於テ、心ヲ起シ、廻向ス。彼ノ導師タル世尊ヨ、我が爲メニ、是クノ如キ法ヲ指示セヨ。其レニ依リテ、我ハ速ニ無上正徧知ヲ證得ス可シ。世間ニ於テ、無等等ノ如來タル可シ。亦世尊ヨ、形相ヲ宣説セヨ、其レニ依リテ、我が佛國ノ功德莊嚴ヲ具足攝受セン。今までは韻文を以て讚嘆して來たのでございまして。無等等の如來と申しますのは、非常に見識の高い如來のことでありまして、かやうな法なり、國土のモデルなりを、

教示して呉れと云ふ願ひでございまして。

(2) 師佛の抑止

是ク語リシ時ニ、阿難陀ヨ、世尊世間自在王如來ハ、彼ノ比丘ニ下ノ如ク告ゲキ。實ニ比丘ヨ、自ラ彼ノ佛國ノ功德嚴飾莊嚴ヲ具足攝受セヨト、彼ハ是ク云ヘリ。

この一節の大意は、お前自分で一つ考へて見よ。と云ふのでございまして。

(3) 比丘の再請

世尊ヨ、然ラズ。我が堪ユル處ニ非ラザレドモ、唯世尊ガ、此クノ如ク諸如來佛國功德莊嚴嚴飾具足ヲ語ルヲ聞キテ、我等ハ一切ノ形相ヲ成就爲サント言ヘリ。我々の力でなすと云ふことは、とても六ヶ敷いことでもあります。世尊が、かくかくお仰せ下されたならば、自分が「コンペヤー」して、これ／＼のものを作りませう。と云ふのであります。

(4) 師佛の説現

然ル時、阿難陀ヨ、彼ノ世間自在王如來應正徧知ハ、彼ノ比丘ノ信心ヲ知リテ、

一億年ヲ通ジテ、八十一億那由他百千ノ、佛國功德嚴飾莊嚴具足ヲ、形狀シ、指示シ、解説シ、開顯セリ。利益ヲ願ヒ、他人ノ福有ラン事ヲ思ヒ、同情ヲ以チテ、佛ノ國ヲ絶エザラシメン爲メ、有情ニ於テ、大悲心ヲ生ジツ、ナセリ。彼ノ世尊如來ノ壽量ハ、滿四十劫ヲ計算セラレタリ。

吾々が地球上のことを説明するのですら、二三十年もかゝつてゐますのに、一億年もかゝつて、佛國功德嚴飾莊嚴を説明されたと云ふのでありますから、一體どの位生きてゐたら宜いのか見當が付きません。一億年の説明といふと、なみ大抵のことではありません。所が世尊の壽命は實に四十劫で、千七百億年と計量せられてをります。

第六章 法藏比丘の諸佛國選擇攝受と誓願建立

(1) 諸佛國選擇攝受と五劫思惟により誓願建立

爾ノ時、阿難陀ヨ、實ニ彼ノ法藏比丘ガ、其ノ八十一億那由他百千諸佛國功德嚴飾莊嚴具足ヲ、盡ク一佛國ニ於テ、攝受シテ、世尊世間自在王如來ノ兩足ヲ頂禮シテ、

右ニ廻リテ、世尊ノモトヨリ退キタリ。

此ニ於テ、五劫ノ間、佛國ノ功德、嚴飾、莊嚴、具足ノ更ニ高大ニ進歩セル、亦一切世間十方ニ於テ、未曾有ノ攝受ヲ爲シ、更ニ高大ナル誓願ヲ起セリ。

「攝受」は「バリグラフワ」でございまして、支那譯で攝取と申します。これは「ウケトル」の意でございます。

「兩足ヲ頂禮シテ右ニ廻リテ退ク」これは前にも度々申し上げました通り、印度の貴人に對する禮でございます。

つまり世間自在王如來が、一億年かゝつて指示し解説せられた、八十一億那由他百千の佛國功德莊嚴を攝受して、五劫の間考へ、高大なる誓願を立てたのでございます。

第七章 法藏比丘無數佛國成就を攝受し終つて殊勝大願を師佛に啓白を

誓ふ

(1) 更に優秀なる無數の佛國成就を攝受し終る

阿難陀ヨ、彼ノ世尊世間自在王如來ニ依ツテ、此ノ八十一億那由他百千ノ佛國成就ノ形狀ヲ、説カレタルヨリモ、比丘ハ、更ニ優秀ニ進ミタル、無數ナル佛國ノ成就ヲ、攝受シ終リテ、彼ノ如來ニ近ヅキテ、世尊ノ兩足ヲ頂禮シ、下ノ如ク言ヘリ。世尊ヨ、我ノ佛國功德莊嚴嚴飾具足ハ攝受セリト。

(2) 師佛所願を宣説せしむ

阿難陀ヨ、是クノ如ク語ラレシ時、世尊世間自在王如來ハ、彼ノ比丘ニ、下ノ如ク語レリ。

比丘ヨ、自カラ説ケ。如來ハ此ヲ隨喜セン。

比丘ヨ、此レ時ナリ。大衆ヲ喜バセ、歡喜ヲ生ゼシメヨ。

獅子吼ヲ吼ヘヨ。其レヲ聞キ、菩薩大士ハ、現在未來ノ時ニ於テ、此クノ如キ佛

國功德成滿誓願安住セシメ、攝受滿足スルナラン。

五劫の間思惟して、八十一億那由他百千の佛國成就の形狀を説かれたより以上、更に優秀なる攝受を遂げたと云ふことで、即ち技師長の「プラン」を變へて、完備した

と云ふところでございます。

「隨喜」と云ふ字は、佛教特有の文字でございまして、非常に上手に使つてございませう、世間一般に云ふところの、贊成と云ふ意味よりも、深い意味で、喜びを同じくすると云ふことを表してゐます。即ち天長節など、國民擧つて、聖壽の萬歳を唱へて、祝福するが如きと同様でございませう。

「獅子吼」は獅子が吼えるといふことであります。獅子が吼えますると、他の狐とか狸とか、等しく頭を垂れて、その威力の前に屈服します。これは倫敦の「レイゼント・パーク」に參りますると、よく實見が出來ます。その様に佛の説法される時は、異學異見の徒が、波を打つたやうに静まつて、その辯舌に聽きとれる。それを獅子の吼ゆることに譬へて云つたものでございませう。

(3) 殊勝大願の啓白を誓ふ

阿難陀ヨ、其ノ時、法藏比丘ハ、世間自在王如來ニ下ノ如ク言ヘリ。
實ニ世尊ヨ、我が云フ處ヲ聞キ給へ。

即チ我ノ殊勝ノ大願ハ、我ガ無上正徧知ヲ證得シタル時、不可思議ノ功德嚴飾莊嚴成就セラレタル處ノ佛國ヲ有セント。

この文は、即ち法藏比丘の優れたる誓願に依つて、覺りをば得たるときは、もうちやんと功德嚴飾莊嚴の成就せられた佛國は、出來上つてゐるのだといふのであります。誓願は實に此の經典の骨子でございますして、四十八願より成つてをります。是れは非常に重大なものでございまして、我々一切の有情は、是の誓願に依つて、救濟せられるのでございます。これは明日、明後日にかけて講義申し上げます。

(二) 願文總說

昨日は世に勝れたるところの本願は、どうして出來たかと云ふ事に就いて申し上げます。今日はその誓願の一つ一つに就きまして、これ／＼のものであるのだと云ふことを御説明申し上げます。

全體この誓願は、今迄支那に傳へられてゐるのに依りますると、四十八(魏、唐)になつてゐると、三十六(宋)になつてゐると、また二十四(漢、吳)になつて居ると色々ございます。西藏あたりの分は四十九願からなつてゐるのです。私の原本は四十六願になつて居ります。それ故一向數が合致してをりません。これと云ふのも昨日申し上げました様に、説いた人は釋迦世尊で、聞いたものは阿難でございます。何分二千餘年の長日月の間のことでございますから、どんな小僧の手で書き移されてゐるのか分りはしません。半分かけてゐたり、三分の一にしてあつたり、とてもやり切れたものではございません。こんなことはもう三十年しますと、私も極樂に參りますから、その時ゆつくり考へることに致します。まあ失はれずに残つてゐると云ふ點でも、結構なことだと思はねばなりません。

この經の願文は他の經から推量致しましても、本願開展の經過をみましても、どうも四十八願の方が本當らしいでございます。觀無量壽經には、四十八願と云つてありまして、明かに四十八の文字が並べられてあるのであります。即ち「遇善知識爲其廣說阿彌陀佛國土樂事、亦說法藏比丘四十八願」でございます。然し乍らこの原本は先に

申しました通り、二つ抜けて、四十六願よりなつてゐるのでございます。これが例の小僧の書き違へやら何やらに起因するのだと、思召して戴けば宜敷うございます。

扱てこの願文の一つ／＼に就いて、申し上げることは後に致しまして、大體どう云ふことになるかと申しますと、大別しまして、

國土
主
大衆

と、この三つに分れるのでございます。

第一に國土と申しますのは、我々都てこの地球上に住んでゐる人間の、頭に適する様に説かれたところの國土組織でございます。

第二に主と申しますのは君主のことでございます。

第三の大衆は、一般人民を指して居ります。

この三つは常に相關聯致すものでございまして、つまりこれに依つて國家と云ふも

のは組織されてゐるものでございます。君主が無ければ國と云ふものは維持せられませんが。例へ又君主があつても、國土や人民がなければなりたつものではございません。例へて申すならば、我々でも北極に行けば、大統領にでもなんにでも好きなものになれませう。然しペンギン鳥や白熊ばかりの所でございますから、幾くら威張つても一向役に立ちません。國土ばかりあつたのでは駄目でございます。人民が居らねばなりません。國土や人民があつても、君主がしつかりせねば困ります。支那でも此頃随分た／＼致して居ります。何でも今晚あたり張作霖の使が、天津の段祺瑞の處に下るとか申しますが、また何とかやるのでせう。スペインとかブラジルとか云ふ國も、兎に角あやふやな事をやつて居る國でございまして、こゝらに行きますと、萬世一系の 天皇陛下を戴いてゐる日本あたりは、まことに有難いと申さねばなりません。それでも中には悪い奴もあつて、警察の御厄介になつてゐます。

又折角人民が居り君主があつても、國土と云ふものがなければなりません。幾ら飛行機があつても、何時も雲の上で何やらもや／＼つとして居る様では駄目でございませ

す。又同じ國土があつても、その國土は立派で完全でなければなりません。幾くら國土があるからと云つて、サハラ沙漠のやうな所は感服できません。又西藏もその類です。青木君は極樂の一丁目の様なことを云つてゐますが、私も先年あの近邊を探ぐつて見ましたが、一萬三四千尺といつても、スリバチの底の様な所でございます。これらもひどう感服致されせん。

兎に角この三つの者が共に揃つて、初めて完全な國家が組織なされるのでございまして、例へその一パーセント缺けて居りましても、十萬分の一缺けましても完全と申されせん。法藏菩薩のはこの三つの具備された、非常に優れた、完全なる國土でございませぬ。何分、一億年もかゝつて説かれたものを五劫も考へて、選擇し、更に優秀なものを攝受して、願を立てられたのでございますから、この四十八願は完全も完全その上乘でございませぬ。我々にはこの考へはちよつと六ヶ敷うございませぬ。

扱てこの國家組織と申しますことも、此處までは地球上のこと、同一でございませぬが、相違してゐます點は、この一つ一つの莊嚴が別々であつて、又互に相入すると云

ふ點でございませぬ。即ち一一の莊嚴が合することが出来るのであります。それで支那に於ける大學者と云はれた人でございませぬ、皆讀み違へをなしたのでございませぬ。而し只一人正しく讀んだ人があります。これは印度の婆藪槃頭と云ふ人で、この人は六世紀の頃、今からちやうど千三百年程先きの人で、日本では聖德太子時代のちよつと前頃にあたる人なのですが、この人が正確に讀んで居ります。勿論これは印度人でございませぬから、私の様なあやふやなサンスクリットの比ではありません。うまく讀み、且つ書いて居ります。

この人は非常な著述家でございまして、著書千部以上にも上つてゐるのでございませぬ。そして無量壽經優婆提舎と云ふものを著しました。これを北魏の終りに菩提流志と云ふ人が洛陽で譯しました。丁度その時代に曇鸞大師が、この無量壽經優婆提舎を讀みまして、その註を書きました。何しろ同時代のことでありませぬから、分らん所は聞き合せたりして、互に相談したことでありませぬ。曇鸞大師は山西省太原府雁門縣の生れで、南京あたりまでも高德が聞へた人でございませぬ。この優婆提舎の註は只今

も現存して居りまして、私共非常にこれを頼りにして居るのでございます。

さて婆藪槃頭は何處を正しく讀んで居るかと申しますと、この四十八願の莊嚴と云ふものは廣相であつて、一方から云へば略相である。そしてこの廣相がとりもなほさず略相であり、略相が即ち廣相である。即ち廣略相入であると云ふ點でございます。

この廣略相入の説明になりますと、一時間の餘裕を戴きませと、完全に出來ませんから、今日は止しておきます。また追つてお話し申し上げることに致します。曾つて大連で講演申し上げました時に、お話し致しました極樂莊嚴の中に詳しく書いてあります。今日は只廣略相入、互に融通無碍のものだと云ふ位にしておきます。

扱てこの相入すると云ふこと、換言すれば、融通すると申しますことの本體は、何かと申しますと、それは「主徳」にあるのでございまして、この主徳が原動力となるものであります。其の證據には、即ち「我は無上正徧知を取らざるべし」と云ふ文句は、何れの願にもその末尾に来て居ります。即ち無上正徧知を取らざるべし、最後の目的であるけれども、かやうくの事が出來ぬ時は、無上正徧知は取らぬのだと云ふの

でございます。これを云ひかへますれば、四十八願の一一のことは、私のこしらへるのじやと云ふことなので、全く主徳が元となつて居ります。丁度電燈の様なもの、楊子江の先きの方の、ミニシバルの發電所が、リバーサイドに於いて、タービンを動して、ダイナモを廻してゐますが、これが原動力でございまして、この經はこの原動力のチームを出してゐるところにあるのでございまして。主人と云ふものは我々の家にも必要なもので、無憂園でも私の居る間は、掃除が行き届いて、何時も美しく清潔でありますけれども、若し私が五年も六年も居らぬ様な事があれば、彼處此處に蜘蛛の巣が張ることでございます。それで主には住持の力、即ち Maintain すると云ふことが必要でありまして、どんな惡政府であつても、無政府より勝れてゐると云ふのは此處のところにあるのでございまして。それで要するに責任をば、みんな主人に負してしまつて、若しこれこれでなかつたならば、自分は正覺を取らぬのだとなつてゐるのであります。

もう一つ願文に就いて申し上げて置かねばなりません。それは恐ろしい程度の高い

觀音勢至かんのんせいしの如きお方に對するものと、又我々の感服出來んやうなものに對するものがございませぬ。それは何故かと申し上げますと、相手のものゝ高低によつて、それ相當の願ねがひが成就じやうじゆされる様ように出來てゐるのでございませぬ。高きは觀音勢至かんのんせいしあたり、低きものは幼稚園ようちえんの生徒と云ふ工合に、恐ろしい程度の高たかいものから、恐ろしい程度の低ひかいものに至る、一切しやうじやうの諸有情しよじやう即ち老ひたものも、若いものも、男も女も、それぞれ相應する様ようにしてございませぬ。

さてこれから願文がんもんの一つ一つに這入つて、御説明申し上げます。

第八章 別願解説

第一願 無三惡趣

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ、地獄ト畜生（體ヲ横ニシテ歩ク）ト餓鬼趣ト阿修羅身ガ、存在スルナラバ、
我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この時の「佛國」は、國土こくどと大衆たいしゆのことでもあります。

「地獄」と申しますのは、地でも牢屋でもございませぬ。苦惱のあるところと云ふ程の意味でございませぬ。此の場合には、地理的に示せるものであります。

「畜生」と云ふのは原字を Tiryagyoni と申しまして、人間を除く他の一切の動物のこととございませぬ。「佛教の原理」の時に申し上げた通りでございまして、文字のまゝでは鳥などはこの類に入りませぬ。四つんばいになつて、體を横にして歩くものゝ意であります。然らば人間でも嬰兒えいじは匍はふて歩きますから、此の時は如何かと申しますと、この中に入らないのでありませう。文字の義は主として獸類を指して居りますが、今は一般の動物を云つたのであります。

「餓鬼趣」この趣も地理的に云つたもので、餓鬼がきの集り位でよろしうございませぬ。この餓鬼と云ふ奴が、頗るわけのわからん奴でございまして、支那で云ふ幽靈に相當するものでございませぬ。原字は Preta で足のもやもやつとした様な奴です。幽靈が靴を穿いてがたがたしたと云ふ事は聞いたこともありませぬ。

「阿修羅」これも亦ブレタの優良品で、朝から晩まで喧嘩ばかりしてゐると云ふ手合です。下等さ加減は何れも皆よく似通ふて居ります。

要するにこの第一願は、我の佛國に以上の様な下等な者どもが、居る様なことがあつたら、其の間は無上正徧知はとらんのだと云ふことでございます。無上正徧知は誓願の成就せられた當體の正覺で、この願は衆生を不虛偽、不輪轉、不無窮の處に置いて常樂を得せしめんための誓願であります。

第二願 不更惡趣

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル處ノ有情ガ、地獄畜生餓鬼阿修羅ノ身ニ墮落セシメシナラバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

第二願は自分の佛國にあるものばかりでなく、生れたものが、地獄畜生餓鬼阿修羅と云ふ様な、下等なものに逆戻りをする様では、無上正徧知は取らんのだと云ふことでありまして、不良少年が感化院に這入つたが、今度は藪の中へごそごそ歸つて來て、かゞんでゐると云ふ様なことでは面白くございませぬ。墮落と申しますのは道心を失

つて惡き處に赴くと云ふことで、即ち逆戻りすると云ふ意味であります。

此處でちよつと申し上げて置きます。此の四十六願中、大抵何れの願にも、その末尾に何々せしめずば、と出て居るのでございますが、これは印度の文法で可能法でございませぬ。尙動詞の變化には、命令法とか條件法とか現實法とかございませぬが、この可能法は命令、能力、推定の意義を持つてゐるのであります。茲では能力の意にとりまして、それ丈の責任のあることを明かして居ります。例へば昨日の觀菊會に於きまして、若し皆様方にお怪我でもありましたならば、お招き申し上げました招主であるこの私に責任のあることになります。それと同じく責任を負ふてゐるので、この四十六願悉く責任を負へる形になつてゐるのでございます。

第三願 悉皆金色

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ於テ、生レタル諸有情ハ、皆同一ノ色、即チ金色ナラザレバ

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。



今度は色のことが云つてあります。亞米利加人が、黒人や東洋人を、顔色が違ふと云つて排斥する。日本は人種平等を唱へるのですが、色の違ふところから畢竟水懸論に終つてゐます。極樂はこんなのでは通用しないのだ、石炭色であつたり、消炭色であつたり、銀色や金色であつたりしてはいけない。皆セイム、カラーでないといけないのであります。そして同じ色でも皆一樣に、黄金の様な美しいのでなければいかなるのであると云ふのであります。

第四願 無有 好 醜

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ於テ、天ト人トノ區別ガ、認識セラル、ナラバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。但シ他ニ順ジテ、天人ノ稱アルヲ除ク。

これは面白い願であります。佛國に於て、天と人の區別がある様な、そんな不都合のある様なことでは、自分は無上正徧知をとらんのだと云ふのでございます。果徳が皆同じでありますから、形に異状のあるわけはございません。而し畫家とか文士とか云ふ様な人が、持つてゐる雅號であるとか、何とか他に順じた名前は、差し支へない

いのであると云ふことであります。私は光瑞と云ふ實名二字より別に雅號などは持つて居りません。

全體彼の佛土は、實相の世界であり、常樂、寂滅、眞如、法性の世界であります。彼處に生れるものは、自然虛無の身、無極の體を受くるので、實の聲聞、實の人天のあるわけはございません。これらは皆因順他方の名稱でございます。

第五願 神 足 智 通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル諸有情ヲ、神足自在最勝ノ波羅密多ニ到達セシメズ、少クモ一念ノ瞬間ニ於テ、百千億那由他ノ佛國ヲ、超過スル事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

どの誓願にもうまいことが書いてございます。地球の様な不都合な、不愉快な處ではございせん。私ももう三十年しましたら、この娑婆を辭職して、極樂に行きうまい事やつてやります。

この處で「神足」と云ふ文字がございますが、これは支那の當て字でございます。神といふのは不可思議と云ふ意で、自由自在な足のことであります。人間は皆足で歩く手で歩く者はございません。覺位は手で歩くかも知れませんが、兎に角脚氣や覺の様な不自由なものでは無い。不可思議自在なる足のことであります。つまり行動に身の自在なることを云つたものでありまして、前にございました六神通の如意通でございます。以下六願は六通に就いての誓願でございます。

「波羅密多」は彼岸に到達すると云ふことで、自分の希望を達すると云ふことであります。

「少クモ」是れは最少限度のことであります。

「一念」これは時間の最短を云つたもので、自分の頭にちよつと感ずる時間、一セコンドの十萬分の一と云ふ程の短時間でございます。こんな短時間を示す時計は、恐らくこの邊の時計屋にもございません。

この願文の中に「百千億那由他ノ佛國」と云ふのがございますが、百千億と申します

のは、十萬に億を掛けたものでございます。億と申しますのは、原字を Kofi と申します。これは日本の様に萬に萬を掛けた億を云ふのではございません。ten million を云ふのでございます。那由他と申しますのは 100 × Kofi × 100 でございまして、百千億那由他の佛國と申しますと、十萬に億を掛け、それに那由他を掛け、それに又三千を掛けた佛國でございます。我々は三千大千世界ですら、よい加減吃驚してゐるのに、百千億那由他と云ふおそろしい澤山な佛國と聞いては、想像だも及びません。その澤山な佛國を、頭にぎくつと感ずる僅かの時間で、超過すると云ふのでありますから、隨分不可思議な足です。やれ光は毎秒十八萬六千哩（二十萬軒）も走ると云つたところで、そんな緩慢なことでは駄目であります。我々もこう云ふ不可思議自在な足を持つてゐましたならば、世界を一周しやうと思へば、やすやすと出来るし、日本まで位なら何時でも思ふた時に行けます。そうなると至極便利が宜敷うございますが、そんな人ばかり多かつたら、第一郵船會社が泣くでございませう。

第六願 宿命智通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル所ノ諸有情ニ、宿命ヲ知ラシメズ、少クモ百千億那由他劫ノ事ヲ、知ル事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今度は第五願の百千億那由他の終りに、劫が附加せられたのでございまして、一劫は四十三億二千萬年の時間でございます。それが百千億那由他と云ふので、随分ひどい數でございます。此のえらひ過去のことを、追憶する智慧を得しめなかつたら、無上正徧知を取らぬと云ふのでございます。

我々は子供の時代の事を覚えだすのですら、もーと霞か霧の様でございます。今朝手紙を受け取つておき乍ら、夕方まで返事を出すのを忘れて居る。いざ出そうとする時、もう船が出てしまつた後で間に合はない。やれ電報だ何だと騒ぎ立てる。あんな愚かしいことゝは大分違ひます。

「宿命」と申すのは生れん先きのことで、「宿命ヲ知ル」と云ふのは、未だ生れ出でない、その前の、その前のことまでも記憶して居ることであります。引いて自他の運命

を知ることです。

要するにこの願文は、智慧と記憶力のことを、誓ふた願文でございます。

第七願 天眼智通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國中ニ生レシメタル諸有情ニ、天ノ眼ヲ得シメズ、少クモ百千億那由他ノ世界ヲ、見ル事ヲ得セシメズバ、
我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今度の願は最後の處が「世界」に變つて居ります。

「天ノ眼」と申しますのは、天から眼が降つてくるものではございけません。眼の等級を擧げたものでございます。百千億那由他の世界を、一つ一つ見ることの出来る眼でございしますから、随分便利な眼でございます。我々の様な不完全な眼は駄目でございします。左を見れば右が見えず、右を見れば左が見えず、正面だけは兩眼で何時も見ることが出来ますが、後面は薩つ張りです。蝦の眼は上に高く突出してゐますし、蠅の眼は複眼でございしますから、餘程具合が宜敷いのですが、それでも後からこそつと行け

ば、蠅も容易に捕へられますから、あんなのはまだまだ駄目です。まあこんなえらい眼をしてゐる人が、地球上には居りませんから、活動寫眞なども安心して映寫が出来ます。

第八願 天 耳 智 通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レシメシ諸有情ニ、天ノ耳ヲ以テ、少クトモ百千億那由他ノ佛國ニ於テ、同時ニ妙法ヲ聞ク事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今度のは耳の誓願でございます。今こつちでは何を云つてゐる、あつちでは何を云つてると聞きとるので、百千億那由他の佛國の、立派な演説をば、一度に聞き分けるのです。ラジオの音楽は、無線電信で明かに聞くことが出来る。停車場に行けば、汽車の汽笛やら雑音ばかりで、何が何やらさつぱり解りません。都て聞くと云ふことは、單に聞く丈けではなく、同時に判断を伴ふて、環境の模様を感知するのですが、一時にがちやがちやと耳に入ると、もう判断に苦しみます。こゝが見る事と異るところでこ

ざいまして、目で見る方は、満目一時に判断が出来ますが、聞く方は仲々六ヶ敷いものです。私の耳などは、此の願には全然落第でございます。眼も大分視力が鈍つて來ましたが、まだこれの方は大丈夫でございます。聖徳太子と仰る賢い殿下は、一時に八人の訴をお裁き成されたさうですが、人間の中では第一でありますが、まだまだこんな事では追つつきません。

こんなまあえらい耳で、澤山の佛國の妙法を一時に聞くことが出来ない様であるならば、無上正徧知はとらんのだと云ふのであります。

第九願 他 心 智 通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル諸有情ニ、他心智ヲ以テ、少クモ百千億那由他ノ佛國ニ生ズル諸有情ノ、心ト行トヲ、熟知スル事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

これは心を一時に知ることには就いての誓願でございます。即ち他の人、及び動物の心を、あいつはこう考へて居る、こいつはこう考へて居ると、見抜かねばならぬので

すから、仲々容易なことではございません。私でも皆さん方が、もう一二時間すると腹が減つて、飯が喰ひたいと、考へてゐられると云ふこと位のことは、判断が出来ます。また店先をぶらぶらしてゐるあの拘摸は、物品をかつ攫ふとしてゐる位のことは分りますが、それ以上は分りません。

「他心智」が、今の様に他人の心を、洞察する智識でありますから、百千億那由他の佛國に生れるもの、心と行とを、熟知できる丈けの心の働きがなければ、無上正徧知をとらんと云ふことです。極樂國土は何れも具合よく出来てゐます。少しこつちにも分けて貰へば至極都合がよいのであります。

第十願 漏 盡 智 通

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル諸有情ハ、少シニシテモ我身ニツキ、執着スル想ヲ起セシナラバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今迄の願文は、外面的の智慧を誓はれたのであります。この智慧が無ければ、今迄の智慧も全く駄目である慧の基本を誓はれたのであります。この智慧が無ければ、今迄の智慧も全く駄目であ

ります。この智を生ずるのは、自分と云ふものに對して、執着があつては駄目だと云ふのです。

「少シニシテモ」とこの最少限度の執着は、即ち我身の執着でございます。一切のものに渡つての執着が、即ち最大限度の執着であります。誰にも執着と云ふものはある。親を思ふ、妻、兄弟姉妹を思ふ、財を思ふ。色々執着の種類もございしますが、その誰をも措いて、最も執着するものは自身でございます。さあ火事だと云へば、我が子は其處に焼け死なんとしてゐるのを見ても、己の命に執着して、逸早く逃れる。これは生物の共有性で誰にもあることです。そうした自分の執着から離れねば、凡てのものに對して、意に隨つて自在、適せざる所なしと云つた調子にま

いりません。

前の六つが、一般諸有情の智の程度を云つてあるのであります。次の願に誓はれた分は、觀音菩薩にも及ぶのであります。

第十一願 必 至 滅 度

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ生レタル諸有情ハ、彼等ハ總テ、大滅度ニ到ルマデ、正シキ位ニ決定セシメラレズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今までは低級でございましたが、これから高級のものを示して居ります。

「大滅度」これは原字で Mahāparinirvāṇa でございまして、Maha は大、Parī は完全、nirvāṇa は滅度でございすから、大滅度となります。而し滅度の度の義は原字にはございませぬ。只滅の義のみでございませぬが、支那の翻譯者が、度を加へて滅度と譯したのです。これはどう云ふ意味であるかと申しますと、一切のもの、存在のある間は、まだ駄目でございませぬ。無存在になつて初めて完全な滅となるのでございませぬ。存在のまゝが無存在であることが大滅度でございませぬ。小滅度でございませぬ。大滅度とは申されませぬ。この大滅度に到るまで、正しき位にゐなかつたならば、我は無上正徧知を取らんだと云ふことであります。

正しき位と申しますのは、原字を Samyaktva と申すのであります。Samyak と云ふのが、正しいと云ふ意味でございまして、次の tva は状態とか、性質とか、位置とかの意を持つて居るのであります。此處では位置の義を取りまして、正しき位置となるのでございませぬ。譯してみますとこんな造作の無い字なのでございませぬが、翻譯するに當つて、仲々閉口した文字でございませぬ。正しき位置と申しまことは、どんなことかと申しますと、例へばこの卓上にございませぬ。土瓶に就て申しまならば、この土瓶の蓋が曲つたり、斜になつたりしてゐる間は、蓋は正しき位置にあるとは申されませぬ。こんなのは不正の位置でございませぬ。まづ直ぐにかぶさつた時が、初めて正しき位置なのでございませぬ。又例へば船に乗りまされるのに、遅刻したかまあ漸く危機一髪の間にあつて乗船する事が出来た。而し餘り取り急いだが爲めに、肝心な切符を求めたことを忘れてしまつた。幸ひこの船の事務長を知り合つてゐるかから、事務長に其處宜敷う取り計つて貰ふと、こう云ふ者は、乗船する権利の、正しからざる状態にある者です。歐洲航路など随分客がこむことがありますので、時によ

りますと、八ヶ月も前から約束をして置かねばなりません。その代り八ヶ月も前から約束して置けば、それまでは何處に居やうと大丈夫です。決して乗りそこなう様なことはございません。これらは即ち決定した正しい位であります。兎に角この正しき位にあると云ふことは、大滅度に達する必要條件で、これで初めて無上正徧知を得るわけであります。

決定と云ふことに就いて、ちつと申し上げます。これをサンガバルマンは必至と譯して居ります。即ち必至滅度としてゐるのでございます。而し私はこれを直譯致しまして、決定と致しました。

少し學問に關することに涉りまするが、皆様にちよつとお話し申し上げておきます。私等の宗祖でございまして、後に謚されて見眞大師と申されました、一代の大徳、親鸞聖人は、此處に破天荒な理由を附せられて居ります。それはこの現世に居る儘で、決定して居るのだと云ふことでありまして、未來の利益のみとは見て居られません。これは現世の利益だと云ふのでございます。まあよくこんな大膽なことが云はれたも

のであります。あれほどの偉人になりますと、違つたものであります。これはどう云ふ意味であるかと申しますと、例へて云へばこうであります。切符を購へば向ふの岸に行くことが出来ます。同じく船に乗らなくても、彼岸に達する資格が出来るので、其處を親鸞聖人が看破されたのでございます。こゝらは實に大徳の大徳たる處でございます。

第十二願 聲聞 無數

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ於テ、無上正徧知ヲ證得セシ時、若シ有情アリテ、聲聞數ノ計算ヲ行ヒ、少クトモ三千大千(世界)滿中ノ一切有情ガ、盡ク獨覺ト成リテ、百千億那由他劫ノ間、此レヲ計量シ得ルナラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

この願は聲聞計算に關する願でございます。是れは當時の印度人の頭によく入つたのでございますが、我々日本人の頭には入り難い文字であります。

昨日の講演中に聲聞と云ふのは、佛の聲を直接に聞いた、佛直接の弟子と申し上げ

ましたが、聲聞數と申しますのは、その弟子の數でございませう。印度では現今十年毎に一回づつ三億二千萬人の頭の數を調査してゐる様でございませう。日本でも國勢調査とか申しまして、十年に一遍づつ調べて居りますが、この聲聞數の計算となると、仲々ちよつと、云ふわけに參りませんから止しておきますが、兎に角三千大千世界に一杯になる程の人々が、皆んな獨覺になりて、百千億那由他劫の間に計量することを得るならば、我は無上正徧知を取らんと云ふ意でございませう。

獨覺と申しますのは、小乗の最勝なものを云ふのでありまして、Pratyeka Buddha のことでもあります。

要するに此の願文は、弟子の多きを云つたものであります。昔印度の風習として、弟子を澤山持つて居れば、賢人の如く思はれたのでございませう。それで師の偉らいと云ふことは、弟子の澤山あることを以て、換へ言葉にして居つた位でございませう。支那でも孔子弟子三千人とか申しますが、皆んなこの類でございませう。

この計算は明後日あたりに又出ますから、其の節もう少しくはしく計算致しませう。

第十三願 光明無量

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ於テ、菩提ヲ得タル時、我が光ヲ計量スルニ、少クモ百千億那由他ノ佛國ノ量(ヲ以ツテ)計リ得ルナラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

此の願と十五願との二つが、この四十六願全體に亘つての原動力でございませう。此の處はまさしくパワーを出して居りまして、次の十五願がメインテナンスの願でございませう。此の願は非常にしつかりしたポイラーを持つて居ります。それから出来る光は、電氣でも五燭光とか、或は十燭光とか、百燭光とかございませう様に、えらい光を出すのでございませう。その光の量は一體どの位かと申し上げますと、即ち百千億那由他の佛國の量を以て、計れぬほどあるのでございまして、若しさうでなければ、無上正徧知を取らぬと云ふ意味でございませう。

佛國の量とあるこの量は、光の照明距離のこととございませう。例へば海邊に立つて

るます燈臺に於きまして、その光のとゞく近邊までの距離を云ふので、此處では百千億那由他の佛國でございませぬ。然しこの量は字義から申せばデイスタンスの方ではございませぬ。メヂアーの方で、デイスタンスの方は度量衡の度であります。それで本來の義より致しますると、度と致ますのが妥當なのでございませぬ。他日修正致します折りは、この度に訂正致しますかも分りませぬ。

以上でこの願の意味は分りますが、最後に一口申し添へます。然らば何故にこの願が、他の願に對して、有力なる原動力となるかと申しますと、凡て一切のものは光が元となるのでございませぬ。實に光によつて一切のものは、棲息もし、發育もすることを得るものでございませぬ。例へば地球上に、色んな生物の棲めるのも、又地球が廻轉致すのも、すべて太陽の賜でございませぬ。太陽と云ふ偉大なものがなければ、地球は枯死するより仕方がございませぬ。これと云ふのも太陽が、光と熱とを、與へて呉れるからなのでございませぬ。これと同じく如來の能力も、光が無ければ役に立ちませぬ。即ち光は力となつて、一切に働いて呉れるのでございませぬ。涅槃經には、光明は大慈

大悲であるとかございまして、あまねく十方世界を照らして、念佛の衆生を攝受して捨てぬと、大悲の本願を誓はれて居るのでございませぬ。それで下の經文には隨分澤山光に就いて色々な光が出されてあります。ミニニシバル、リバーサイドでやつてゐます電氣も、light + power (光+力)でありますから、電線を通り、聽てタングステンを通過するとき、光となつて發し、力を出すのでございませぬ。

第十四願 眷屬長壽

世尊ヨ、若シ我ノ佛國ニ於テ、我レ菩提ヲ得タル時、我佛國ニ於ケル諸有情ノ、壽命ノ計算ヲ爲シ得ルナラバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。但シ本願力ヲ除ク。

今度は佛國に於ける諸有情の、壽命の願でございまして、その大衆の壽命は、千年や萬年やそんな短いものでは駄目だ。計量することの出来ない、つまり無量壽でなくてはならぬのだ、と云ふ意味でございまして、光明無量の佛徳によつて、其處の聖衆も亦光明無量、壽命無量たることが出来るのでございませぬ。

「本願力」は自己の希望の意でございます。本願力を除くと云ふ事は、安樂國土も眞に結構であるが、衆生濟度の爲めに、他方國土に出るものは、これを除くの意味でございます。この娑婆世界は嫌になつたと云つて、首を縊つて死んだり、水に投じて死んだり、鐵道往生したりすることゝは違ひます。私もこんな不都合な不愉快な娑婆世界は嫌でございますけれども、無理に首を縊つて死ぬ程の命知らずではありません。もう三四十一年辛抱してからと思つてゐます。要するに此の願は、自分の希望で他國に出るものは此の限りでないのです。出沒と云ふ意味から行けば、沒の義で云ふと、海外移民あたりにも當ります。

第十五願 壽命無量

世尊ヨ、若シ我レ菩提ヲ得タル時、我ガ壽量ニ終リ有リテ、少クモ百千億那由他劫ノ計量ヲ爲シ得ルナラバ

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

これは勢力をメインテインする願でございます。夕方愈々太陽が西方に傾いて、林の上に沈んで行くが如きは、光線をメインテインする力が無い爲めでございます。今頃の様子に十一月になりますと、それも速ふございます。ノールウェイの地方に旅して見ますと、五六月頃には太陽が晝夜の差別なく照つてゐます。これらは光線を何時までも持續してゐるものでございます。

維持力は總て物を持續するだけの能力でございます。死んだものには維持力が喪失せられますから、分解作用を起し、酸素は酸素で空中に逃げ、炭素は炭素、窒素は窒素と云ふ具合に各々逃げてしまひます。熱帯地方なら二日ともてません。これと申しますのも、全く維持力のないのに因るものでございます。支那の時局の如き、維持者が無いために動亂の絶ゆる期がございません。

こゝでは如來の命が、國土と大衆とを維持してゐるのでございまして、前にもありました様に、どんなにえらい光であらうが、それが時々消える様ではだめであります。それで持續と云ふ事を表はすために、壽命無量を持つて來たのであります。此の願は前の第十四願と順序を前後した方が宜しいと思ひます。支那譯にはさうなつて居りま

す。

第十六願 離 譏 嫌 名

世尊ヨ、若シ我レ菩提ヲ得タル時、

其ノ佛國ニ於ケル諸有情ノ、不善ノ名スラ有ルナラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

今度のは不善の實なきのみでなく、さう云ふ名すらないのだと云ふこととございませす。例へば領事館の法廷に呼び出されて、ひどい目に叱かれ、はよはよ這々の體で四つん匍ひになつて、こそ／＼逃げ出す様な、そんな不體裁なことは勿論、そんな不善の呼び聲すらないのだと云ふ意味でございませす。

第十七願 諸 佛 稱 揚

世尊ヨ、若シ我レ菩提ヲ得タル時、

無量ノ佛國ニ於テ、無量無數ノ諸佛世界ニ、(我ガ)名ヲ稱揚セシメズ、讚嘆ノ言ヲ述ベシメズ、稱揚ノ聲ヲ高クセシメズ、供ニ高唱ヲ發セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

この願は廣告の願でございませす。

何事を致しまするのにも、廣告をしつかり致さねばならないものでございませす。仁丹であるとか、中山太陽堂の化粧品であるとか、何れも廣告に滞りないから、販うれ行きも良好なのでございませす。私がこうやつて翻譯ほんやくしまして、講演申し上げるのも亦一人にても多く知らしめんためでございませす。

「我ガ名」と申しますのはこゝでは如來にょらいの名でございませす。

讚ほめかたも單なる讚ほめ方とは違ひませす。讚嘆さんたんの言を述のべ、稱揚せうやうの聲を高くすると云ふ事でないといけませせん。マグナボックスにかけられた様な程度のあるな細微の聲では駄目です。こゝらあたりが印度文いんどうぶんの非常に完全なるところでございませす。

扱あつてこの廣告の効力と云ふものは、即ち我等もこの願力がんりきに依つて、妙法を聽くことも、譯やくすことも、この誓願せいがんなるものも分るのである、と云ふ點にございませす。

第十八願 臨 終 現 前

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、他ノ世界ニ於ケル有情ガ、無上正徧知ニ心ヲ發シ、我名ヲ聞キツ、清淨心(ヲ以テ)、我ヲ憶念セシメ、彼等ノ死ニ際スル時ニ於テ、我ハ比丘ノ大衆ニ圍繞恭敬セラレ、其ノ現前ニ立タズシテ、其ノモノ、心錯亂スルナラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

この願は要するに死に掛けの者に對して、一切の責任を負ふたところにあります。清淨心は佛の心でありまして、我名を聞くことでもあります。

自分が比丘の大衆に取り圍まれて、死人の前にたゞずして、其のもの、心が錯亂したならば、無上正徧知を取らぬのだと云ふ意味でございますが、我が宗祖は、此處の處を臨終現前の願と申してゐます。又臨終正念の願とも申し、現前導生の願とも申しまして、唐の善導大師以後盛んに云ひ出されたものらしいでございます。又來迎の願とも云はれてゐるのでございますが、これは即ち迎へに來てくれることでもあります。淨土宗あたりで多く用ひられる言葉でございます。然し我が宗祖はこの言葉を

大變に嫌つてゐます。

茲に一人の病人があると致しまして、この病人が愈々命數盡きやうとして、臨終に際してゐる。死ぬるか生くるかの、まことに危険な状態にあります。電報は打つたのだが、親族のものは未だ一人も來ない。と云ふ様な手ぬるい心細いことでは死目に遇へません。そんなことでは何にもならない。故に我が宗祖は臨終現前と云ふ事を、嫌つてゐるのでございますが、併し乍らこの願文を嫌つてゐるわけでは無くして、それを希望する者を嫌つてゐるのでございます。私は毎年日本に歸りますが、曾つて船が一時間早く着きまして、誰も出迎へに來て居りません時がございました。然し私は郵船會社にコンツと這入りこんで、待つて居つたのであります。日本だから斯う云ふ横着も出來ます。此れが若し、フィンランドとか、ラトビヤとか、バルカン、ユゴースラプの様な所でありましたら、なんともやつてみやうがございません。公使館、領事館の御厄介にならねばならん所です。

我が宗祖が來迎を非難致しましたのも、其の處でございまして、初めから我が家に

歸るのであるから、迎へなどを希望するわけのものでないのだと云つてあります。これは私も同感であります。

つまりこの願は、菩提心は發したが、あくまでも自力の修行をたのんで、不淳の心で行かうと云ふ、若存若亡の不定の機に對するもので、佛の大悲は、この手を來迎の方便化儀によつて、迎へ取ると云ふので、案内のよく分らない國に行く様に思ふ者に對して、特に造つたものでありまして、案内の分つた國へ行く者には必要はないのであります。

第十九願 植諸徳本、念佛往生

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、無量無數佛國ニ於ケル諸有情ハ、我名ヲ聞キツ、此ノ佛國ニ於テ、生レントスル爲ニ心ヲ起スベシ。諸善根ヲ又廻向スベシ。彼等ハ少クトモ十念ヲ發起シ、相續スル事ニ依リ、此ノ佛國ニ生ゼシメズバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

但シ、無間業ヲ造ルモノト、正法ノ誹謗ト、障害ヲ行フ諸有情ヲ抑止ス。

此の願は非常に大切で、何れの願にも一般的にかゝつてきて居ります。

こゝの處支那譯には「設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法」とありまして、我名を聞くと云ふことは出て居りません。至心、信樂、欲生とこの三心が如何なる關係によつて、衆生往生の因となるものか、詳しいことは第廿六章の願成就文で申し上げます。

第十三願は、リバーサイドの發電所で、電氣を起すのでございまして、愈々電氣に光を付けるのは此の願であります。即ち光明無量のパーにより、一切の生物を極樂に引き込むところの願であります。それは丁度魚が餌針にひつばられる様に、引き込まれるのでございしますが、然らば如何にしたら、魚がかゝるのかと申しますと、それは「我が名を聞け、又諸善根を廻向せよ」と云ふことにあります。即ち如來の名を聞くことが、諸善根なのであります。これはつまり心の働きでございしますが、次に時間で、その責任を確めてございします。これから十念云々の所であります。

「十念」これは仲々六ヶ敷い字でございまして、古來大徳の間に、色々な議論のある

字でございます。十念は次に發起と相續と、この二字を伴ひまして、時間のことでございませう。曇鸞大師も亦これを時間と見て居ります。

何故に斯く時間を誓はれたのかと申しますと、若存若亡のものがある爲めに、怪しげなものを除かれる爲めでございます。

茲でちよと注意を要するのは、最少限度は一念であつて、後にくる願成就文には一念とありますのに、何故に十念となされたのか、八でも九でもかまわんではないかと申しますと、只一念では相續の義が表はれない。それで一の次の單位の十を以て、連續の義を示すべく、かやうに十をくつ附けたものであります。又此の念とある所を聲とも讀まれてあります。十聲とは南無阿彌陀佛を十遍讀誦すること、念佛する義でございます。念でも稱でも同じ事でありまして、口と意の相違はあれど本は一であります。

最後に一ヶ條除外例がございます。これは責任を負はないものであります。「無間業」これは五逆の事でございまして、親を殺したり、正法を滅したりする、大

悪人のことであります。

「正法ノ誹謗ト障害」この誹謗と云ふ方は、消極的のもので、障害と云ふ方は、積極的でございます。

「抑止」やめると云ふ程の意味でございます。非常に六ヶ敷い字でございます。昔からこれも種々異論のある字でございます。觀無量壽經下品には、五逆十惡諸の不善業を作りたる惡人に對して、攝取して、入れるんだとありますが、この經では抑止することになつてゐます。種々な異論のあると云ふことは、全體支那譯の不完全から來たものでございます。支那譯では除として居りますが、抑止の方がどうも面白い様です。私も除としてやらうかとも考へましたが、また後の人が議論すると困りまするから抑止とやりました。原字はかうでございます。Sthāpayitvā でありまして、sthā, payi, tvā と三區分致します。

この sthā は止とか留とかの意を持つて居りますし、又坐の義をも持つてゐます。payi は paya で、催起相の符徴でございます。元來催起相は語根に aya を附加して

作るのでありますが、語根が *stha* に終る動詞、例へば *sthi* (知る)とか、*sthi* (與ふ)とか、*stha* (立つ)とかには、別つに *payā* を附加して作ります。これを連續體にするときは、*stha* は一に代へられて、*sthi* を附加すると云ふのが、文法の規則でございます。催起相とは、他をして其の語根(動詞)の表示する作爲をなさしめ、又は其の状態に居らしめることを示すものでございます。次の *sthi* は連續體で先きのと同じものであります。

今申しました様に留の意もございしますので、抑留と譯さうかと思つたのですが、留は元來しめ込んでゐるときの意味でありまして、今は入れないと云ふのでありますから、抑止とやつた方が妥當のやうでありますので、抑止と譯しました。要するに抑止とは、そつといふ事を行ひつゝある間は、門を禁ずると云ふ程の意でございます。

第二十願 一生補處

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ生レタル所ノ諸有情、彼等總テハ、無上正徧知ニ於テ、一生補處タラシメズバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。但シ

彼等ノ本願ニヨリテ、菩薩ノ大鎧甲ヲ着テ、一切世間ノ利益ヲ徧ク知リ、一切世間ニ勤修シ、一切世間ニ大滅度ヲ勤修シ、一切世間ニ於テ、菩薩行ヲ行ハント欲シ、一切諸佛ヲ供養セント欲シ、恒河沙數ノ如キ諸有情ヲ、無上正徧知ニ安住セシメ、又其レヨリ以上ノ行ニ向ヒ、普賢行ヲ行フ者ヲ抑止ス。

この願文の主體は、一生補處と云ふ所にあります。この「一生補處」と申します字は、頗る妙な字でございまして、つまりは候補者の義でございまして。これは原字を *okajā-tiprabaddhah* と申しまして、一遍生れて其の處を補ふと云ふ意味でございまして。同じ生れかたでも我々のとは大分違ひます。虫類は生きてゐる間に色々姿を變へます。同皮脱いで蛹となり、また蛾といふやつになります。こんなのが即ち一生補處でありまして、議員の候補者として當選したものが、前議員の任期のあけるのを待つてゐる様な類で、必ず議員となつて、其の處を補ふ。こう云ふのを一生補處と申すのでございまして。佛國に生れた諸の有情が、無上正徧知に於いて、一生補處たらしめなかつたら、無上正徧知は取らんと云ふのであります。但し茲に「彼等ノ本願ニヨリテ」以

下は除外せられるのであります。

この願は觀音菩薩等に適應せる願で、非常に程度の高い願であります。菩薩の甲や鎧を着て、一切世間の諸有情を、大滅度に到らしめるので、一切の衆生を救済のため海外に向つて移住するものでございます。

一切世間に於いて菩薩行を行はんと欲し、一切諸佛を供養せんと欲し、恒河沙數の如き諸有情を無上正徧知に安住せしめんとする者のみではなく、それ以上の行に向ふものは抑止すると云ふのであります。なせ抑止するかと申しますと、安樂世界で一生補處にならずして、世界の何れの地方にも出て行く希望者の爲に、是の抑止即ち除外例を設けたのであります。つまり其れより以上の行に向ひ、普賢行云々とは海外移住を云つたものでございます。日本政府も是の様に海外移住者を優待して呉れますと宜しうございますが、なかなかやつてくれません。

次に普賢行のことに就いて説明申し上げます。これは原字を Samantabhabra と申します。これを譯して普賢と申しますが、これは直譯通りで宜敷うございます。これ

は最上の意味を持つ字でございます。英語の Most, Very 等に相當する意なのでございます。この普賢行に就いて詳しく説かれた、大方廣佛華嚴經と云ふお經がござります。これが、これを唐の則天武后の時に、實叉難陀と云ふ人が譯して居ります。又唐の徳宗皇帝貞觀十一年に、迦濕彌羅から來ました般若と云ふ人が譯して居ります。この他にも一譯ございますが、何れの譯にも普賢行のことが書いてあります。それを普賢行願品と申しまして、此の華嚴經の中で、一番大切な處なのでございます。これにはどんな事が書いてあるかと申しますと、即ち、

願我臨欲命終時、盡除一切諸障礙、面見彼佛阿彌陀、即得往生安樂刹、我既往生彼國已、現前成就此大願、一切圓滿盡無餘、利樂一切衆生界、彼佛衆會咸清淨、我時於勝蓮華生、親觀如來無量光、現前授我菩提記、蒙彼如來授記已、化身無數百俱低、智力廣大徧十方、普利一切衆生界、乃至虛空世界盡、衆生及業煩惱盡、如是一切無盡時、我願究竟恒無盡。とございます。又普賢行の十願を擧げますと、

禮敬諸佛、稱讚如來、廣修供養、懺悔業障、隨喜功德、請轉法輪、請佛住世、常隨

佛學、恒順衆生、普皆廻向。でございます。

要するにこの普賢行と申しますことは、どう云ふ事であるかと申しますると、今までは力が甚だ弱くて駄目である。一遍極樂國土に行つて、無量光如來の威力に依り、その力をもつて、一切の有情を一人も残さずに、救済してやると云ふのでありまして、資本無しで何事も出来ない。一つ向ふへ行つてうんと資本を借り出して、一仕事してやらうと云ふのでございます。

扱て右でこの二十願の大體を御説明申し上げましたわけでございますが、極樂世界のことは何れも皆具合よく出来て居りまして、この娑婆世界のやうな不都合なことは少しもございません。私ももう三十四年致しましてから、極樂世界に參り、一生補處の菩薩になる積りでございます。第二十願以下の願文に就きましては、明日引き續いて御講義申し上げますこととし、今日はこれで御免を蒙ります。

第廿一願 供養 諸佛

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我ノ佛國ニ生レタル一切ノ諸有情菩薩ガ、總テ

一ツノ朝食ノ前ノ時間ニ、諸ノ佛國ニ行き、百佛千佛百千億佛乃至億那由他百千佛ヲ、一切ノ淨妙供具ヲ以ツテ、禮拜セシムルニ、佛ノ威力ヲ蒙ラシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

今日の處は昨日に比して、全般的に解釋が易ふございます。或は二時間かゝらないだらうと思ひます。

これは字の通り讀んだのでは、ちよつと分り苦ふございますが、此の意味は要するに、朝食前に澤山な佛國に行くのに、急行列車の様に、小さな驛を抜きにして行くのではないけないので、一つ／＼皆行つて、而かも立派な供養や禮拜やらをすると云ふこととでございます。若し此の時に佛の威力——即ち助成——を蒙ることが無い様であれば、無上正徧知は取らないと云ふことなのでございます。

この威力と申しますことが、大變に優れた點でございます。行くには佛の威力と云ふものが無ければ、行くことが出来ません。又差し上げたものを受け取つて貰ふのにも此の威力がかゝつてくるので、兩方とも威力と云ふことは、大切なことであり

まして、此の場合は佛の威力を蒙らねばならぬと云ふのでございます。

第廿二願 供具如意

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我ノ佛國ニ於テ、諸菩薩ガ、此ノ如キ色相ニヨリテ、善根ヲ植ヘント欲セシメ、即チ下ノ如キ

金、銀、摩尼珠、吠琉璃、硨磲、玻璃、珊瑚、水晶、琥珀、赤珠、エメラルド等、或ハ亦其他ノ寶、或ハ一切ノ香華、花鬘、香膏、燒香、香粉、衣服、傘、蓋、幢、幡、燈火、或ハ總種類ノ歌舞等、若シ此クノ如キ供物ガ、想ヲ起スト共ニ面前ニ現出セズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願文は讀んでしまへば何のことは無いのでありますが、翻譯には仲々閉口致しました。まだ我々の見たこともない様な珍らしいものが、何やら澤山竝べてあります。これらのものは、要するに淨妙供具のことでございます。

前の第二十一願に、百佛、千佛乃至億那由他百千佛を供養讚嘆するとございました

が、供具が所念に随つて容易に現出しなければ、とてもそんな藝當は出來つてございませぬ。この願は其の供具に就いて誓つてあるところでございます。

此處に「色相」と云ふ字がございますが、仲々翻譯に閉口致しました字でございませぬ。單に色のみにしてをこうか、或は又色相としやうかと、幾度も考へたのでした。色相とする方がどうも穩やかなやうでございませぬので、斯く色相と致したのでございませぬ。これは原文には Yatharūpa とあります。この中の rūpa と云ふのが「色」即ち form の意でございまして、形を持つてゐるものと云ふ意味でございませぬ。この他にこの字は色即ち「カラー」の意味も持つてゐるのであります。而し佛教で云ふ色は、主として form ベクトラムで分析した色にも當るのであります。而し佛教で云ふ色は、主として form の意味で、物の形態を申すのであります。般若波羅密多心經には、色受想行識と、この五蘊があげてありますが、この場合の色は「シキ」で形態を云ふので、やはり同一なのでございませぬ。故に私はこれを色相と致しましたが、又色像と譯しましても差し支へないと思はせぬ。

次に「善根ヲ植ユル」と云ふ文字がございますが、これが又大變面白い字なのでございます。前の第十九願にも諸善根と云ふことがございましたが、彼處で申し上げませんでしたから、此處でちよつと申し上げます。これは原字を Kugalantula と申します。この Kugala と云ふのは、Good, auspicious, skillful, clever, well 等の義があります。善のことなのですが、日本で用ひます善には、善惡の時の善と、又能不能の場合の能の義と二つございますが、此處では積善の家に餘慶ありと申す時の、善惡の善の意義でございます。尤もこの字を熟達と讀んだ場合も後にはございます。次の nula は root の義でありますから、二つを合しますと善根となるのでございます。

その次に植ゆると來てをります。これが文として非常に妙味のある所でございまして、従つて印度文の特徴である點なのでございます。支那文もフィロソフィカルな點は印度文と大差ございませんが、サイエンティフィカルな點になりますと、遠く印度文に及びません。どんな植物でも根をば地下におろしますと、次第に太く殖えて參ります。この地に下ろすと云ふことは即ち植ゆると云ふことであります。根とある

から従つて植の字を持つて來たのでありまして、此の植の字に依つて、善の増加、即ち増長の義を表はしたものでございます。此處らが印度文の Analytical science (アナリイテイカル、サイエンス) に出來てゐるよき適例でございます。

それでは如何なることが善根であるかと申しますと、一切の諸佛を供養することなのでございます。全體人に物を施すと云ふことは善い事でございます。貧乏人に物を施してやると云ふことは善いことに違ひありません。況して立派な人であるとか、目上の人に物品を献上すると云ふことは、一層のよいことなのであります。同じ献上するのにしても下等な物よりか上等のものが遙かに宜敷うございます。それでこの願文中には随分立派な物ばかり並べてあります。これらのものは皆、今日の日本邊りに持つて行きますと、十割の税金を取られる様なものばかりでございます。私曾つて畏れ多き事乍ら 攝政の宮殿下に御献上申し上げたことがあります。粗末な物品でございましたので恐れ入つて居ります。

兎に角善根をば植へやうと思へば、何か品物が無ければなりません。それで此の願

では廿一箇の物品と、一切の寶、及び總種類の歌舞を擧げたのでございます。

これに就いては一つ一説明も申し上げませんが、今も申しました様に、日本などに持つて行けば、何れも十割税を取られる口であつて、立派な物ばかりだと思召されたら宜敷うございます。その中でも、

「花鬘」と申しますのは、花の冠と云ふ意味ではございません。花環位な意味なのでございます。どう云ふ格好をした花環かは、私もまだ見たことがございませんから、見當が付き兼ねますが、印度で胸のあたりに掛ける一種の裝飾で、どうやら環の様な格好をしたものなのでありませう。日本で僧侶が用ゆる「輪袈裟」と思召されたら宜敷うございます。印度の佛像あたりにも、花環をかけて居るのをよく見受けます。

「香膏」は西洋では Ointment と譯して居ります。即ち香のある膏のことを云ふのであります。

「焼香」は香料を焼いて、それから生ずる香を、空中に放散することでありませう。

「香粉」は支那では「オシロイ」と云ふ字であります。此處で云ふ香粉は、粉になつて居る香料を云つたものであります。これも亦十割税から脱れることの出来ない口でございます。

次の「衣服」とか「傘蓋」とかは、先づ十割の税金がかゝらなくて済むものなのでありませう。何故傘の様なものまで入れたかと申しますと、印度の様に暑熱の甚だしい國では、必ず入用の物であるからでございます。傘蓋と申しますと、元北京政廳の玉座の後方に立て、あつた様な、あんな風なものなのでございませう。

「幢幡」この幢と申しますのは、棒に布をぶら下げた様なものなのでございます。幡と申しますのも、幢と似たりよつたりのものでございます。要するに旗の様な幟の様なものなのでございますが、どちらが縦になつてゐて、どちらが横になつて居りましたか、只今ちよつと記憶致しません。英語では banner, flag, ensign 等に譯されて居りますから、旗の様なものであることには違ひございません。兎に角この幢幡を貴人の前に立てると云ふことは、印度の風習なのでございます。

「燈火」これも印度で供養の一つであつて、寺院などで燈明を上げますが、あんなも

のであります。

以上あげました様な品物の他に、尙、色々な種類の歌や舞やを以て供養しやうと思ふと、其の瞬間に是れ等の物が、スーと目の前に出てくる様なのでなかつたら、無上正徧知は取らぬと云ふのでございまして、永安公司がチーフセールをやつてゐるからと云つて、こつこつ買ひに行く様な、そんなへまなことでは駄目だと云ふのでござい
ます。

彼の世界のことは何から何迄具合よく出来て居ります。

第三三願 説一切智

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我ノ佛國ニ生レタル諸有情ニ、皆盡ク一切智ニ
俱ヘル説法ヲ、語ル事ヲ得セシメズバ

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

先きの二願は吾々向きの願でございました。つまり貧乏であるから、金が無いとか、
財産がないとか云つて泣き事を云つてゐる、吾々向きの願であつたのでございました

が、今度のは觀音とか勢至とか慈氏とかの偉いお方を相手とした願なのでございます。
扱てこの「一切智ニ俱ヘル説法」と申しますのは、總ての智慧に相當した説法が出来
る實力を云ふのでございます。觀音菩薩の様な人が、極樂に行けるのも、全く斯ふ云
ふ願があるからで、この智辯によつて恒沙無量の衆生を開化するのでございます。

第三十四願 供養諸佛

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ於ケル諸菩薩ハ、此クノ如キ想ヲ起
ス。其ハ即チ、我等此ノ世界ニ住シツ、無量無數ノ佛國ニ於ケル、諸佛世尊ヲ、

斯クノ如キ供具ヲ以ツテ、恭敬尊崇奉事供養ス。即チ、
衣、鉢、臥具、椅床、醫藥、器具、華、燒香、燈火、香、花鬘、香、香膏、香
粉、衣服、傘、幢幡、諸種ノ歌舞音樂、珍寶ノ雨等ト云ヒテ、彼等ガ想ヲ起ス
ト共ニ、佛世尊ガ哀愍ヲ起シテ、攝受セズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

此の願は前の第二十二願と同じ様でございしますが、違ふところはその献上品が、小

包郵便で行くところにございまして、何分ズルイ話なのでございしますが、若しそれが受け取られぬ様なことがあれば、無上正徧知は取らんのだと云ふことでございまして。又此處にも供養の品物が上げてあります。どれもこれもわけの分らんもので、翻譯するのには仲々困りました。

この中で不審に思はれますのは「醫藥」と云ふ字でございまして。佛に病氣のあるわけのものではございせんから、必要無い様でございしますが、支那でも無病の人に人蔘を上げる様に、諸佛の様な尊貴の方に差し上げるもの、一つなのでございまして。

第廿五願 那 羅 延 身

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我ノ佛國ニ生レタル所ノ諸菩薩ニ、皆悉ク那羅延金剛堅固身勢力ヲ、得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

此の願の中に「那羅延」と云ふのがございまして。これは仲々分り苦い文字でありまして、支那でも音譯でのみ表はされてあります。原字を Nārāyaṇa と云ふので、天の力

士のことでありますが、私はまだ一度も會つてみたことがございせんから、どんな格好をして居るのか分りません。多分常陸山の様な強いものなのでございませう。而かも單に力が強いばかりでは無く、その上金剛石の様に堅い體をしてゐると云ふ恐ろしい奴であります。常陸山が幾くら強いと云つても、針を刺せば血が出ますし、硝子を踏めば足も切れます。處がこいつは恐ろしい堅い奴でありますから、足が切れるとか、或は血が出るとか云つた様なことは少しもございせん。幾ら常陸山が強いと云つても、これとはてんで比較になりません。

この願文は要するに、彼の佛國に生れた諸の菩薩が、皆なこの那羅延の様な力があり、その上金剛石の様な身をしてをらなかつたならば、無上正徧知を取らんと云ふことなので、衆生開化のためには、どうしてもこうした強固な身力が要ると、誓はれたのでございまして。

此處でちよつと申し添へてをかねばならないことは、第廿一願よりこの願までに這入るべき一願が脱けて居ります。極樂に生れるもの、色のことは、今迄の願で充分言

ひ表はされてをりましたが、姿のことに就いては、ちよつとも云つてございません。これから推して見ましても、此處にどうしても姿に關する願が入用でございまして、従つて一願缺けてゐることも明かになるわけでございます。他の支那譯などには完全にこの姿の願文があるのでございますが、どうしたわけか此の原本には缺けてございませぬ。これと申しますのも、例の小僧さんが書き寫しの際に、間違ひをしでかしたことに起因致すものでございます。他譯を參照致しまして、この原本にも、不足の一願を差し入れることは出來ますが、そんな譯にも參りませんから、この儘にしてをきました。又西藏譯にも缺かさずちやんと持つて居りますので、私はこの西藏譯を參照致しました。

この不足の願と申しますのは、つまり卅二相に就いての願なのでございます。この三十二相に就ての願成就文は、第三十五章に掲げられ、佛國に生れる菩薩は、皆三十二の大丈夫相を具有し、身體完備し、無限無量功德を有せり。と云ふに徴しても、どうしても此處らあたりにこの願があらねばなりません。魏譯唐譯皆第二十一願になつ

て居ります。ちよつと餘談に亘りますが、話の順序として、少しばかり説明を加へてをきます。

この卅二相は男子の理想の姿なのでございます。御婦人ではございません。例へて申しますと、頭とか顔とか手足とか身體の諸機管に就いての、三十二通りの特徴を擧げたものでございまして、こんな圓滿な相をしてゐる者は、印度の今日、三億有餘の人民中に、恐らく一人もございませんでせう。昔の印度人は、まあやつとこの中の二三相位は備へてをつたのでございませう。その特徴はどんなのかと申しますと、その二三をあげて、先づ頭から申しますと、その頭髮は右旋してゐねば、通用致しません。次に眼は「ウルトラマリン」の様に紺青で、海水の澄んだ然かも濃い様なのでないといけません。鼻はスラーと高いので、お多福の様に低いのでは駄目であります。尤もこの鼻高相は三十二相の中には見えませんが、八十種の形相の中に出て居ります。一般に日本人あたりの鼻は低うございますが、印度人などは何れも高うございます。この相から見ましても、印度人はアリヤン系の人種と云ふのが、どうも正統らしいご

ございます。もとく印度と云ふ國は、雜多な民族から成つてをりましたのを、アリヤン系の人種の一部が、次第に南下して来て、遂ひに印度の本國に進入して、其の土著民族をば征服したのでございますから、單にアリヤン民族のみでは無くして、勿論他の土民も混つてゐるのでございますが、大體から云ふと、アリヤン系統と云ふのが本當らしいでございます。

次に三十二相の一つくを掲げますと、

- 一、首具肉髻相 (Uṣṇīsa-gīraska-tā) (首に肉髻を具する相)
- 二、頭髻右旋相 (Pradakṣiṇāvarta-keṣaḥ) (右旋の頭髮を有する相)
- 三、額廣平齊相 (Sama-lalataḥ) (前額平正なる相)
- 四、眉白毫相 (Uṣṇā-keṣaḥ) (眉間の白毫ある相)
- 五、眼色紺青而眼睫如牛王相 (Abhinīla-netra-gopakṣmā) (眼は紺青にして、眼睫は牝牛の如き相)
- 六、齒四十具足相 (Catvāriṅśad-dantaḥ) (齒牙四十を有する相)

- 七、齒齊平相 (Sama-dantaḥ) (平正なる齒を有する相)
- 八、齒根密相 (Avirala-dantaḥ) (齒密にして間隙なき相)
- 九、齒牙白相 (Su-gukla-dantaḥ) (齒の甚だ白き相)
- 十、咽中津液得上味相 (Rasa-rasāgratā) (最良の味感を有する相)
- 十一、頰車如獅子相 (Siṃha-hanuḥ) (顎骨獅子の如き相)
- 十二、廣長舌相 (Trabhūta-tanu-jihvaḥ) (舌は長くして且つ細き相)
- 十三、梵音相 (Brahma-svaraḥ) (梵音ある相)
- 十四、臂頭圓滿相 (Su-samivṛta-skandhaḥ) (肩先の甚だ圓き相)
- 十五、七處平滿相 (Sapto-sadaḥ) (七つの隆起ある相)
- 十六、兩腋圓滿相 (Citrā-tarāṇsaḥ) (cirāntarāṇsaḥ) (兩わきの圓滿なる相)
- 十七、皮膚細滑紫摩金色相 (Sūksma-suvarṇa-cchaviḥ) (皮膚は細滑黄金の如き相)
- 十八、正立不屈手過出相 (Sthitānavanata-pralambabhūtā) (直立して屈せざる相)

ときは、手長くして膝に垂るゝ相)

十九、上身如獅子相 (Sinha-pūrvārḍha-kāyaḥ) (半身獅子の如き相)

二十、身縦廣等如聶卓答樹相 (Nyagrodha-parimaṇḍalāḥ) (身の圍は尼拘樓陀樹の如き相)

二十一、一孔一毛右旋相 (Ekāika-roma-pradakṣiṇāvartāḥ) (一々の毛髮は右旋する相)

二十二、毛向上旋相 (Urdhvaga-romāḥ) (身の毛上に向き生ずる相)

二十三、陰藏如馬王相 (Koṣopagata-vasi-guhyāḥ) (男根は内部に藏る相)

二十四、腿美圓相 (Su-vartī-torūḥ) (腿の圓き相)

二十五、足下不露節相 (Utsaṅga-pādāḥ) (足の踝節は露出せざる相)

二十六、手足掌柔軟相 (Mridu-taruṇa-hasta-pāda-talāḥ) (手掌足蹠共に柔軟なる相)

二十七、手足指合縵綱相 (Jālavānaddha-hasta-pādāḥ) (手足には綱からまる相)

二十八、指纖長相 (Dirghāṅgulīḥ) (指長き相)

二十九、手足具千福輪相 (Cakrāṅkita-hasta-pādāḥ) (手足には輪のしるしある相)

三十、足下安平相 (Su-pratiṣṭhita-pādāḥ) (足地に安住する相)

三十一、足趺高隆相 (Āyata-pāda-pārsṇīḥ) (足の踵は廣き相)

三十二、小腿如獸相 (Aineya-jāṅghāḥ) (脛は「アーンイーネーヤ」鹿王の如き相)

この三十二相の他に、八十隨形好と云ふものがござります。これは三十二相の外に、極く細いものを八十程、擧げたものでござります。

第二十六願 土 德 難 量

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我其ノ佛國ニ於テ、如何ナル有情モ、莊嚴ノ限界ヲ極メタル者アルナラバ、少クモ天ノ眼ニテ見、如是キ莊嚴、如是キ威力アル佛國ナリト云ヒテ、種々ノ形相ヲ知リ能フナラバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は中々面白い願でございます。

この願文の大意を申し上げますと、彼の佛國に生れたものが、天眼をもつてして、其の國境を見極めがつくやうであれば、無上正徧知は取らぬと云ふことであります。

「天眼」と申しますのは、昨日の第七願の所にもございました様に、一瀉千里の便利な眼のことを云つたもので、何處でも此處でも無限に見ることの出来る、無限大の眼なのでございます。前の願では如何なるものを見ても、見えないものは無いと誓ひ、今度の願では莊嚴の限界を見極めたものがあればと誓はれましたので、一寸見たところ矛盾した様に思はれるのであります。

昔支那の國に矛を售る商人と、盾を售る商人と二人ありましたが、矛の方の商主は、この矛はどんなものでも、突き徹すことができる、自慢してゐたのであります。盾の方の商主は、又盾の方の商主で、この盾ならば例へどんなものでも破ることは出来ない堅いものだ、と自慢をして居たのであります。處が或る時でした、或る人が、「其の矛をもつて盾を突き徹してみろ、どうなるものか」と云ひましたので、兩人は共にギ

ヤフンと參つてしまひました。それから矛と盾とを喰つ、けて、矛盾と云つたんださうでございます。これはまあ餘談に過ぎませんが、極樂國土と云ふ様な具合のよい處に矛盾があるやうではいけません。無限大の眼である以上、此處に又無限大の國土でなければならぬ道理であります。

第二十七願 見道場樹

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ於ケル、最モ少劣ナル善根ノ菩薩タリトモ、少クモ百由旬ノ高サノ、廣大ナル色相ノ、菩提樹ヲ知ラザレバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

印度の習慣と致しまして、樹下に座して、色んな事を考へ、覺を開くと云ふのが學者のやる習慣となつて居るのであります。釋迦世尊も亦かやうにして、覺をお開きになつたものでございます。全體この願は、菩提樹のことに就いて、述べられたものであります。この釋尊の菩提樹と云ふ樹は、大變に面白い樹でございます。葉が心臟形で、その先に尾が長く出てをります。原字は Pippala で、學名は Ficus Religiosa

と申します。迦葉佛の菩提樹は、學名を *Ficus Indica* と云ふので、種類が違つてをります。迦葉佛の菩提樹と云ふのは、枝から根が出て、空氣中をぶら垂つて、土地迄達して居るのでございまして、大變によく擴がる樹なのでございまして。是れは原字を *nyagrodha* と申します。前の學名 *フィカスレリジヲサ* の方の菩提樹は、只今無憂園にも所持して居りますから、御覽になり度いお方には何時でもお目に掛けます。此處らでは中々の珍木でございしますが、印度ではありふれた樹でございまして。又慈氏菩薩の悟られる時の菩提樹と云ふのは、學名を *Messun Ferra* と申します。この樹は大變美しい花を持つ樹でありまして、日本の櫻花の様に觀賞用として、人の眼を樂しませるのであります。原字を *nagakasara* と申し、支那ではこれを龍華と譯して居ります。上海の西南端に龍華寺と云ふのがありますが、あれもこの龍華を取つたものでございまして。この樹の質は、*Iron wood* で大變に堅い樹でございまして、建築用の木材としても使用されますが、今も申しました様に、多く觀賞用として、花の美麗を翫賞せられて居ります。即ち以上これ等の樹は、何れも佛の覺りを開く時の道具立てでございまして、

て、此願文は即ち其の道具立てを示したものでございまして。

扱てこの願文の初めに「少劣ナル善根」とありますが、この少劣と云ふのは、原字を *paritta* と申しまして、*Limited* と云ふ風な字義でございましてから、局限せらるゝの意味なのでございしますが、つまり分量の限られた少いことになるので、少劣と致しました。即ち局限せられたる善根のことを云ふので、佛智不思議を疑つて諸行往生する根機であります。

次に「百由旬」と云ふのがあります。この由旬には色々違つた説がありまして、大變六ヶ敷い字なのでございまして。色々調べも致しましたが、どうもしつかり分りません。原字は、*Yojana* と申します。印度で色々な物の長さやら、又は距離やらを計るに用ゆる單位でございまして、1 *Yojana* はおよそ 4 *kroga* ほどのものでございまして。丁度英吉利の八九哩の長さに相當致します。日本で云つたなら里であるとか、英國では哩とか、又佛蘭西では料とかの様に、距離を計るのに用ゆる單位なのでございまして。印度では昔この *Yojana* を以て、戦争の時に進軍の驛程にして居りました。この *kroga*

と申しますのも亦、印度で距離を計算するに用ゆる單位なのでございますが、現今では矢張りこの Kroga が訛つて Kos と云つて居ります。少し洒落た印度人中には、哩などを使ふ者も居りますが、一般にはこの Kos が用ひられて居ります。

扱て今申しました様に、一由旬と云ふのは八九哩のものでありますから、約四萬五千尺として、百由旬と申しますと、ちよつと四百五十萬尺の長さでございます。これほど高くて廣大なる菩提樹が、分らん様な菩薩では、駄目であると云ふのであります。が、これで最もつまらぬ善根の菩薩を云つたので、若し上等な菩薩でありましたら、どれ位廣大な菩提樹を見極め知るか、ちよつと速断出來ませぬ。

第廿八願 得 辯 才 智

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ於テ、如何ナル有情モ、教示シ、又ハ讀誦シ、修行ヲ爲スベキ時ニ、彼等一切無礙辯才ニ到達セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は無礙辯才の願でございます。幾ら名論だからと云つて、吃り／＼云ふ様な

のでは駄目だと云ふことでございます。

今から二千三百年位昔、支那の國は丁度秦の始皇帝の時代でございましたが、この時代に韓の國に韓非子と云ふ二十三歳位の、少壯な著述家が居りました。或る時始皇帝が、この人の著した書物を読みまして、大變感服致し、筆では仲々の名論を述べて居るが、果してどんな辯才を振ふ人なのだらうと、早速御前に召されました。處が豈圖らんや、彼れは生れつきの吃であつて、口吃にして充分に云ふことが出來なかつたのであります。成程筆では名論卓説、一世を動かしましたけれども、肝心の口の方は、頗る有礙辯才で通らなかつたのであります。極樂國土はこんなことでは通用致しません。それで若し自分が菩提を得たる時は、都てのものを無礙辯才にする力があるのだと云ふ願でございます。

「辯才」と申しますのは、原字を Pratisamvit と申します。この字義は Analytical science で、即ち物を分解する學問でございます。それでありますから、唯べちやべちや喋るのが、辯才と云ふわけのものではないのであります。即ち其の盡くを

分解説明して、他人に分らせる力が必要なのであります。原字の義では今申しました様に、辯才の義は持つてゐませんので、どう譯したか最も適當であらうかと、色々考へも致しましたが、漢文譯家はこれを辯才と譯して居りますので、私もこれに従つて辯才と致しました。

第廿九願 國土清淨

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ノ光明照耀シテ、普ク無量無數不可思議無等無算ノ佛國ヲ、完全ニ見セシムル事ハ、研磨セル圓鏡ニ、圓面ヲ見ルガ如ク爲シ能ハザレバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は要するに、その光明が無量無數不可思議無等無算の佛國を照耀して、明瞭で無かつたならば駄目であると云ふのでございます。

「研磨セル圓鏡」と申しますのは、奇麗に磨かれたところの鏡を云ふのでございます。磨くと云ふことに研と云ふ字が用ひてゐるのは、鏡が金屬性のもので出来て居る

からでございますして、印度文と云ふものは、斯様な些細な處まで、都て具合よく出来て居るのでございます。次の圓面を見るが如しと云ふのは、文章の綾でございますして、真によくきちつと合つてゐることなのでございます。

第卅願 寶香合成

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ於テ、地上ヨリ虚空ニ到ル間、天人界ヲ超過シタル香ニシテ、如來菩薩ニ供養スルニ適應セル、一切寶ヲ以ツテ作りタル、種々ノ勝レタル香爐ガ、百千有リテ、其ノ中ヨリ常ニ放香セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願文は香と香爐とが願體になつて居ります。天や地にあるやうな、あんなあつたふれた粗末な香ではいけない、其れ等を超過した結構な香爐が、十萬ほどあつて、その中から何時も勝れた香氣が、ヒューヒュー放散せられてゐるのであつて、惡臭の紛々としてゐる便所の様なものでは、駄目であると云ふのでございます。

第卅一願 寶雨妙雲

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ於テ、種々ノ勝レタル香氣アル寶華雨ガ、不斷ニ下リ、亦妙音ヲ下ス處ノ雲ガ、不斷ニ彌覆セラレズバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

前の願では香氣が、下から上にヒューヒュー上るのでございましたが、今度のは上から下に向つて降るのでございます。上海の空などは何時も煤煙で蔽はれてゐますから、時々雨が降つても、何んだか黒味を帯びてゐる様な始末であります。こんなことでは極樂は通用致しません。色々な勝れた香氣を持つてゐる寶華雨が降るので、音楽と云つても雲の中で起る雷の音の様な、あんな不愉快なものではございません。それは非常に妙なる音楽であるので、斯ふ云ふ雲が常に瀾漫してをらない様では、無上正徧知は取らぬと云ふことなのでございます。

第卅二願 觸 光 柔 輒

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其等ノ諸有情ハ、無量無數不可思議無等世界ニ於テ、光明ニヨリ照明セラレ、彼等ハ一切天人ヲ超過セル所ノ、快樂ヲ具足スル

事ヲ得セシメザレバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザルベシ。

以前の願では唯、光の Power のみを論じてゐましたが、此處では其の Power の利益を誓はれて居ます。リバーサイドの發電所から送られました電氣は、電球の中にある「タンクスデン」を通過し、光明となつて初めて吾人を益します。それと同様に無量無數不可思議無等の世界が、光明に照され、非常な快樂と云ふ利益を具足するんだと誓はれてあるのでございます。具足と云ふのは完全なることでありまして、缺けてゐるのは具足とは申されません、不足でございます。この願は要するに光の利益を示した所でございます。

第卅三願 聞 名 得 忍

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、周ク無量不可思議無算ノ佛國ニ於テ、諸菩薩ガ、我名ヲ聞キツ、其ノ聲ニ俱フ處ノ善ニ依リテ、生ヲ離ルル事アルモ、正覺ヲ證得スル際マデ、總持ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

是れは仲々解りにくい願でございます。「マイトレイヤ」の如き高級な人に對する處の願でございます。我々向きの願ではございません。

我が名を聞きつゝの「我名」と申しますのは、無量光世尊の名のことです。この無量光世尊の名を聞きつゝ、其の聲に俱ふ處の善根に依りて、假令、生れ更る様のことがあつても、覺を得るまで、忘れる様のことがあつてはならない。と云ふことでございます。

この「生ヲ離レル」と申しますのは、離れると云ふ字は原本には、超へるとか或は過ぎるとかの字が使つてございまして、此處では離生とか、轉生とかするのが適當なのでございますが、つまり生れ變るの意味なのでございます。

次の「總持」は原字を dhāraṇī と申します。この「ダーラニー」は眞言宗で多く用ひられてゐる一種の呪文のことでございますが、字義は支へ持することでありまして、總持を得ると申しますると、忘れることのないと云ふ意味なのでございます。

第卅四願 女人成佛

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、周ク無量不可思議無算ノ佛國ニ於ケル諸女人ガ、我名ヲ聞キツツ、清淨信ヲ起サシメ、菩提心ヲ起サシメズ、又女ノ身ヲ厭惡セシメ、彼等生ヲ離レテ、同ジク若シ再ビ、女身ヲ得ル事ヲ有ラシメバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は女人が、無量光如來の名を聞きつゝ、信心を起して、無上正徧知に心を起さない事があり、又女の身を嫌つてゐるのにも拘らず、生れ變つて二度と又女の身になる様な、不都合な事はさせないのだと云ふことなのでございます。

「清淨心」と云ふのは、Prasāda で如來心のことです。この清淨心の前にあります「聞キツツ」と云ふのは、連續體でございまして、日本語にも連續體と云ふものは矢張り持つてゐます。「厭惡」は「エンヲ」と讀むので、「エンアク」ではございません。

此の願文は支那譯とちよつと異つて居ります。支那譯では、設我得佛。十方無量。不可思議。諸佛世界。其有女人。聞我名字。歡喜信樂。發菩

提心。厭惡女身。壽終之後。復爲女像者。不取正覺。

原本には諸女人が我が名を聞きつゝ、清淨信を起さしめ菩提心を起さしめず、とございますが、右の如くサンガルマン譯では、「歡喜信樂。發菩提心」とありますし、又菩提流志譯には、「得清淨信。發菩提心」とございまして、どちらも發菩提心とあつて、發しめると書いてありまして、私の原本と明かに相違して居るのでございます。これは果してどちらが正しいのであるか、此處で俄に指摘致すことは出来ません。こう云ふ處も追つて充分の研究をしてみる積りでございます。

此の願は要するに、女人の様なつまらない體は嫌だと思ふ者は、二度と女人となつて生れ出る様なことのない様にさせると、誓つた處にあるのでございまして、彌陀の大悲は、男女の區別なく成佛せしめるのであります。これは單に一の佛國であるのみならず、各國に通ずるところの願なのでございます。

第卅五願 人 天 致 敬

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、普ク十方ニ於テ、無數無量不可思議無等無算ノ

佛國ニ於テ、諸菩薩ガ、我ガ名ヲ聞キテ、五體投地ノ歸命禮ヲ爲シ、菩薩ノ行ヲ行ズル時、諸天ニ依リテ尊敬セラレズバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

「五體投地」と申しますのは、頭、手、足などを土地につけることでもあります。

「歸命禮」は原字を、Namah と申します。これは Namas のことなのでございますが、S が言葉の末尾に参りますと、常に h に變ると云ふのが文法上の規則で、別に意味のあるわけのものではございません。これは敬禮すると云ふ意味の外に服従と云ふ意もあります。英語には bow とか obey とかの譯がつけてあります。私はこれを歸命禮、と三字に譯しました。

要するにこの願文は、佛の聲を聞きて、歸命禮を行ふものは、諸天の尊敬を受けると云ふ事でございます。若し尊敬を受けなければ、無上正徧知は取らぬと云ふことなのでございます。

第卅六願 衣服隨念

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、如何ナル菩薩モ、衣服洗濯干乾裁縫染色業ヲ行ハザルベカラズ。亦新製ノ衣寶ガ出テ、此ノ如ク自身ニ生ゼシメント念ヲ起スト共ニ、如來ヨリ此ヲ印可(恩賜)セラレズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は仲々奇抜な願でございます。

全體極樂で、洗濯とか、裁縫とか、染色業とか云ふ様なことを、しなければならぬ様ではいかないし、新しい衣服であるとか、或は寶玉と云ふ風なものが欲しいなあとと思ふと、その瞬間に、如來から授る様なのでないといかんだ、と云ふことなのでございます。

この願中に洗濯干乾と云ふことが、特に入れてありますが、吾々の様に溫帶圈に住つて居ますものには、この洗濯といふことは、さして問題とは思ひませんが、南洋とか印度のやうな暑い國になりますと、朝の一日中でも、割合冷しい時間に於てすら、膚につけてをる着物など、もうベチャベチャになります位ですから、とても三度や四度

やの洗濯では逐ひつく話ではございません。その様な次第でありますから、特に此處に誓を立て、あるのでございます。

「染色」と云ふのは讀んで字の通り、着物などを色染めすることでありませう。京都あたりの至つて質素な御婦人方は、一枚の着物を染め替へては染め替へて着て居られます。而し極樂國土は、そんな必要はないのであります。

第卅七願 受樂無染

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ生レルト共ニ、諸有情ハ、漏盡阿羅漢ノ比丘ノ第三禪ヲ満足セルガ如キ、快樂ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願文は愉快な氣持を云つたものでありますから、私にはどうも分りませぬ。「漏盡」の漏は、箆で水を汲んでも、水は盡く漏つて汲むことは出来ませぬ。あのことを云ふので、智慧の足らない意なのであります。漏盡阿羅漢と申しますのは、そうした漏が悉く無くなつた、偉い阿羅漢を云ふので、快樂はその阿羅漢の比丘の第三禪

を満足した様な状態を云ふのでありますから、えらいどうも六ヶ敷い快樂でございませす。恐らくこの心の分かるお方はございませすまい。まあ我々が腹がへつた時に、たらく飯を食ふとか、眠むい時にスヤ／＼安眠するといつた様な快樂と、想像するより仕方ございませすまい。比丘の第三禪を満足する様な快樂と申しますのは、まあこんな風なことであります。而して此處で云ふ快樂は、身體と精神とこの兩方を満足させる快樂を云ふので、最も内面的な法樂境であります。

第卅八願 見 諸 佛 土

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ生レタル諸菩薩ガ、彼等ガ此ノ如キ色相ノ佛國功德嚴飾莊嚴ヲ願フナラバ、ソレト同ジキ色相ヲ、種々ノ寶樹ヨリ生現セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

これはまあ珍妙な願でございませす。

こう云ふ色相をした佛國の功德莊嚴が欲しい、あゝ云ふのが欲しいと思へば、すぐ

それと同じ形をしたものが、種々の寶樹から出てくるのでありまして、此處らは實に極樂の極樂たる處で、具合よく出來て居ります。我々でも他人の立派なものを見ると欲しいと云ふ考へがすぐ起ります。あゝこれは實に立派な卓子だと、幾ら涎を垂らしてみても、そう安々自分の物になつてくれません。處が極樂國土は仲々そんなに都合に出來てゐないのであります。

第卅九願 諸 根 具 足

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我名ヲ聞キテ、他ノ佛國ニ生レタル所ノ諸菩薩ヲシテ、根力缺乏ニ赴カシムル事アラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は前の那羅延の願に對するものでございまして、あれは佛國に生れたるもの、即ち國內のもの、強大を誓つたものでございませすが、今度のは他の佛國に生れたるもの、所謂海外移民の方をいふたものでございませす。

この願は要するに海外移民の菩薩が、根力缺乏する様では駄目だと誓つたものでご

ございます。鼻がなかつたり、眼つかちであつたり、手が痺れてゐたり、足が脚氣であつたりする様な、不調法な事はさせないんだと云ふことでございます。

この根力^{こんりき}缺乏^{けつぱつ}の「根力」と申しますのは、先きにもございました、五根^{ごこん}の根^{こん}を指したもので、英語の Organ のことでもあります。私も大分根力^{こんりき}缺乏^{けつぱつ}に及んで、耳は全然駄目でありましたし、眼も視力が大分鈍つて参りました。昔は一町先に、少々な細いものがあつても、見分けがつかしましたが、今頃は昔程充分でございせん。極樂國土^{ごくらくこくど}はこんなことではいけません。自分は無論のこと、海外に移居してゐるものまで、その根^{こん}力を缺乏^{けつぱつ}さ、ないと云ふのでございます。

第四十願 住 定 見 佛

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其他ノ諸佛國土ニ住セル菩薩ニ、我名ヲ聞クト共ニ、善分別ト名ケル三摩地ヲ得セシメズ、(又)其ノ三摩地ニ住シツ、一瞬間(刹那)ニ遊行シテ、無量無數不可思議無等無算ノ諸佛世尊ヲ禮觀シ、然モ其ノ三摩地ノ心ヲ失フナラバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

これはまあ素敵滅法^{すてきめつぽう}六ヶ敷いことをする願^{がん}であります。

この願^{がん}もやつぱり海外移民に對するもので、我が名を聞いたと同時に善分別^{ぜんぶんべつ}と名付くる、三摩地^{さんまぢ}を得ると云ふのであります。善分別^{ぜんぶんべつ}についてちよつと御説明申し上げます。これは原字を

Suvibhaktavati

善 分 別

と申します。この善に二つの意味がございまして、「能ふ」と云ふのと、「容易」と云ふ意味とでござります。Vibhaktā は「分別」で、次の vati はそれを「所有してゐる」と云ふのでありますから、つまりは分別の意なのでございます。それに Su と云ふ接頭詞^{じやうごし}を附加したので、この接頭詞^{じやうごし}を附けた時は、次に來るものを容易にする義がござります。

三摩地^{さんまぢ}は前にもございました様に、定^{ぢやう}に入ることなのでございます。この定^{ぢやう}に這入

つてゐた儘で、一セコンドと云ふほんのちよつとした時間内に、無量無數不可思議無算の佛世尊をぐる／＼と巡つて、併もその一つ／＼の佛世尊に禮觀をして、三摩地の心を依然持ちつゞけてゐると云ふのでありますから、光や電氣が走る様な、あんな遅いことでは、到底そんなことは出来ません。

要するにこの願は坐つてゐて走ると云ふ、素敵に六ヶ敷い願でございます。こんな藝當はこの娑婆世界では、ちよつと六ヶ敷うございます。

第四十一願 生尊貴家

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我名ヲ聞キテ、此ニ供ヘル善根ニ由リテ、諸有情ガ大覺ニ達スル迄、尊貴ノ家ニ生ル、事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願には何處だとも書いてございません。それで果して極樂國土内のことであるのか、海外のことであるのか、判断がつき兼ねますが、尊貴と云ふことを云つてある以上、極樂國土内のことではございますまい。全體極樂國土には、尊貴とか、卑賤と

かの差別があるわけのものではなく、皆一樣のものでなければならぬからであります。支那譯には他方國土諸菩薩衆とありまして、明かに他方國土になつて居ります。いづれにしてもこれは、利他度生の方便の爲めでございます。

この願文は讀んで字の通りでございますが、此處に善根と出てをりますのは、我が名を聞くことを指したものでございます。

第四十二願 具足徳本

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、他ノ佛國ニ於テ、諸菩薩ガ、我が名ヲ聞キテ、ソノ聞キタル善根ニ依リテ、正覺ニ達スル迄、彼等ハ一切ノ菩薩ノ行ヲ、歡喜愛樂シ、諸善根ヲ具足スル事ヲ得セシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願文の大意は、名を聞いて、その善根によつて、都ての菩薩行を愛樂し、その諸の善根を、完成することが出来ない様であれば、無上正徧知は取らぬのだと云ふのであります。

この時の愛樂は「アイラク」ではなく、「アイゲウ」と讀むので「ゲウ」と讀むときは、希望の義であります。が、「ラク」と讀むときは樂しみの意なのでございます。

第四十三願 住 定 敬 佛

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我名ヲ聞クヨリ、他ノ世界ニ於ケル、諸菩薩ニ、普成ト名クル三摩地ヲ、獲得セシメズ、(又)其レニ住セル諸菩薩大士等ハ、一瞬間ヲ經テ、無量無數不可思議無算ノ諸佛世界ヲ恭禮シ、正覺ノ際ニ至ルマデ、スベテ其ノ三摩地ガ、中間ニ消失セシメバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

先に坐つて走る願がございましたが、あの願によく似た願であります。

「普成」是れは翻譯に大變閉口した文字でございます。原字を、Samanānugāmi と云ふのでありますが、菩提流志は、これを平等と譯して居りますし、康僧鑑は普成と譯して居ります。私は今是等の譯に對して、否議するわけではございませんが、暫く普成と譯したのであります。元來この字は Attended by, furnished or provided with

等の意味の字でありまして、この Samanta だけならば、普成でも平等でも差し支へございせんが、次に anugata とありますから、普成やら平等だけでは少し意味が足りません。この字と同形で、Samanvāgata と云ふ字がございます。玄奘三藏はこれを成就と譯して居ります。これから推してみても、普成と致しますが、この場合最も適譯と存じます。これは事物の完成を云ふのでございまして、幾ら三分の二出來上つたからと云つても、未だ三分の一残つてゐる様では、普成だとは申されないのでございます。例へて申しますと、横濱正金銀行の様に、立派に出來上つて、既に事務をとつてゐると云ふのが、普成でありまして、北四川路の郵便局の様に、外廊は出來上つたが、未だ事務を取る迄に運んでゐないと云ふのは、普成とは申されぬのであります。「三摩地」と云ふのは、原字を Samādhi と申します。原文はこの字の次に、antara と云ふ文字が使つてあります。前の四十願の所では、これを「心」と譯したのでありますが、こんどは「間」を以つて譯しました。何故かと申しますと、神足遊行の間に定意を失はぬと云ふのは、何れも同じことなのであります。この願では神足遊行の外に、

無上菩提に至るまでと、同一の事を時間的に保證せねばならぬからでございます。

第四十四願 隨意聞法

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、其ノ佛國ニ生レシメタル諸有情ハ、此ノ如キ教ヲ聞カント願ヘバ、心ノ起ルト共ニ、此ヲ聞カシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は要するに聞きたいと思ふ説法を、何時でも自由に聞かれる願でありまして時間的に云つたものであります。

第四十五願 不退轉

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得タル時、我ガ佛國、及ビ他ノ佛國ニ於ケル、諸有情ガ、我名ヲ聞キ得テ、彼等ハ名ヲ聞クト俱ニ、無上正徧知ヨリ不退轉ナラシメズバ、我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願は仲々面白い願でございます。

先きの第十九願に我が名を聞きつゝ、少なくとも十念を發起し、相續することに依

つて、佛國に生せしめずば、無上正徧知を取らざるべしと、安樂國に必ず生るべきことを保證したものでございますが、この願は無上正徧知より退轉せぬと云ふことを、保證した願文なのでございます。でありますから、前の十九願は入國を保證したるもので、此の願は資格が失せないことを保證したものでございます。初めの願文にも、安樂國の有情が、大般涅槃から、惡趣に退轉することがあつたら、無上正徧知を取らぬとありましたが、あれはこれに比べますと、餘り直接的に申して居りません。然らば何故にこの願が必要であるかと申しますと、他の佛國の諸有情が、名を聞きつゝ、入國せざるものがありますからして、其の入國せざるものゝ爲めに、特に此の願を起したものでございます。

第四十六願 得三法忍

世尊ヨ、若シ我菩提ヲ得テ、佛導師タル時、佛國ニ於ケル、其ノ諸菩薩ハ、我名ヲ聞キ得テ、彼等ハ名ヲ聞クト俱ニ、第一第二第三ノ法忍ヲ得セシメ、諸佛法ヨリ不退轉ナラシメズバ、

我ハ無上正徧知ヲ取ラザル可シ。

この願が最後の願なのでございます。元來から申しますと、四十八願が正當なのでございますが、どう云ふものかこの原本は、二願脱けて居るのでございます。而し支那譯にはちやんと四十八願ございまして、この願は第四十八願に置いてあります。

この願文中には第一第二第三の法忍と、法忍に一つ／＼番號がうつてございます。即ち此處では法忍の種類を擧げてありません。只番號のみなのでございますが、これは三法忍の事を表したものでありまして、この法忍の最高を無生法忍と申します。無生法は涅槃に導くところの法門でございまして、この時の法忍と云ふのは要するに忍耐のみでなくて、此の法を聞き得るところの資格を有することでございます。忍は原字を *Kṣanti* と申します。それで忍耐には違ひございませんが、此處では法を聞くに堪へ得る力のことでございます。先年アインスタインと云ふ相對性原理で有名な學者が、日本を訪れましたが、その際澤山な人々が、何でも大學者の説を拜聽せんものと、山の様に集りました。アインスタインは、其の時英語で話したか、佛語で話したか、

獨語で話したか、私は行つて聽かなかつたから存じませぬが、兎に角何を云はれたのか殆んど分らなかつた。其の翌日から誰も聽きに行くものが無くなつた。といふ事があります。彼の佛國はこんな都合なことではどうもなりません。悉く法忍を得せしめて、尙諸の佛法より退轉せしめない、と云ふのでございます。

これにて大體願文を終へたわけでございます。これを大別致しますと、國土、主、大衆と、この三つに分類出来るのでございますが、これを詳細に分類致しますことは、學者と云ふ暇人に委すことに致します。何れにもせよ、不足、脱漏と云ふ様な不完全な點は些かもございせん。どんな事でも、なそうとする事一々達せられるのでございせん。

第九章 重 誓 偈

(1) 法藏比丘重誓を偈説す

亦實ニ阿難陀ヨ、法藏比丘ハ、此クノ如キ誓願ヲ説キ終リテ、其ノ時ニ、佛ノ威

カヲ承ケ、伽陀ヲ説ケリ。

此處にも威力の字がございます。是れは佛教特有の字でございます。都て何事も主の力を蒙らねば出来ない。と云ふことなのでございます。

次にまたガーターを説いてあります。願文の初めにガーターを以て、世尊を讚嘆してございましたが、又願文の終りに、ガーターを説いて結んであるのでございます。ガーターは原字を *Gartha* と申しますので、支那では、伽他、或は伽陀の字を以て譯してございます。次の偈陀は、四句より成つてをるのでございますが、支那にも五言絶句とか、七言絶句とかございます様に、この四句から出来てゐると云ふのも、詰りあゝ云ふ風なものなのでございます。

さてこの第九章の偈陀の原本が、非常に悪ふございまして、破れたり、失はれたりした箇所が随分澤山ございました。ミノロフ博士にも、そう云ふ箇所は問ひ合せも致しましたが、破れて無い箇所だけは、讀むことは出来ないと申します。仕方がございませんから、彼處から引つ張り、此處から引つ張りして、やつと集めて、不完全なもの

のでございますが、左の様に譯しました。よい加減な譯でございますが、而しこれで私のベストでございますから、先づ御辛棒をお願いいたします。

(2) 一、無等の布施を受くるものと成らざるべし

(上)若シ我此クノ如キ奇特超勝セル本願ヲ、發起セズシテ、菩提ニ到達シタル時は、(下)(我ハ)光有ル有情ノ最上者、十カヲ所持シ、無等ノ布施ヲ受クル者ト、成ラザル可シ。

この偈の大意は若し自分が、四十八願の様なすぐれた本願を起さずに、無上正徧知を得た時は、光り有る有情の最上者とはならない。又無比の布施を受ける資格のある、偉いものにはならない。と云ふのであります。

「上」の偈は讀んで字の通りであります。が、「下」の方で「光有る有情」と申しますのは、次の最上者と云ふ文字にかゝつてくるので、富山の烏賊とか、又は螢が光るからと云つて、光ある有情とは申されません。

次に十力と申しますのは、如來は十通りの力を持つて居りますが、其れを云つたも

のでございます。力は智慧ちえで如何なることでも出来ることでございます。左に掲げますと、

- 一、知是處非處力 (Sānāsthāna-jñāna-balam) (善よことなるか、善からざる
ことなるかを知る力)
- 二、知 業 報 力 (Karma-vipāka-jñāna-balam) (業の熟せることを知る力)
- 三、知他衆生種々欲力 (Nānādhimukti-jñāna-balam) (種々の傾向を知る力)
- 四、知世間種々性力 (Nānā-dhātu-jñāna-balam) (種々の性質を知る力)
- 五、知他衆生諸根上下力 (Indriya-varāvara-jñāna-balam) (善よき機根か善から
ざる機根かを知る力)
- 六、知一切道知處相力 (Sarvatra-gāmanī-pratipaj-jñānam) (一切の處又は境涯
に到る途を知る力)
- 七、知諸禪三昧力 (Sarva-dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatī-samīkleṣa-vyav
adāna-vyutthāna-jñāna-balam) (解説と靜慮と平等の觀を得ること、清淨

なること、罪障を清むること等、一切を知る力)

- 八、知宿命智力 (Pūrva-nivāsānusmṛitī-jñāna-balam) (前世の境涯を記憶する
ことを知る力)

- 九、知天眼力 (Cūṭy-utpatti-jñāna-balam) (死すこと、生ること、を知
る力)

- 十、知漏盡力 (Ācraṇa-kṣaya-balam) (諸漏即ち汚れの滅盡せることを知
る力)

以上のごときものがございます。これを如來にょらいの十力と申すのでございます。

次は無等むとうの布施ふせと云ふのでございますが、この無等むとうと申すことは、原字を Atulya と云ひまして、較くらべものゝないことであつて、即ち較くらべものゝない立派な施し物の意なのでございます。要するに此處は斯様に立派な布施ふせを受くるに適した、高い資格があるのだと云ふことでもあります。

(3) 二、種々の寶の王國の王と成らざるべし

(上) 若シ我如此キ高大ニ、更ニ多クノ種々ノ卓越セル、天ノ壯觀ノ國ヲ有セザレバ、

(下) 喜ンデ地獄ニ於テ、苦ヲ受クルトモ、種々ノ寶ノ王國ノ、王ト成ラザル可シ。此の偈は國土の容量を云つたものでございます。

(下) に寶の王國とございますが、これは寶物の澤山ある國と云ふ意味ではございません。寶と云ふ字の附けられて居るのは、文の一種の綾でございます、立派な國と云ふ位な意味合ひでございます。

(4) 三、力を有する世界の主と成らざるべし。

(上) 若シ我正覺ノ座ニ到達セル時ニ、十方ニ速ニ我名ノ賞讚ガ、

(下) 廣ク多ク異レル佛國ニ於テ、行ハレズバ、我ハカヲ有スル世界ノ主トナラザルベシ。

願文の中に廣告についての願がございましたが、只今此の偈でも、それを重ねて誓つてあります。即ち自分の名前をば、廣く多く異なる國々で、普く賞讚して呉れない

様であれば、力ある世界の主人にならないと云ふことでございます。而も實に心持ちのよい文字を以つて、その事が表はされて居ります。

扱てこの廣告と云ふことは、大變に大切なことであるが、何處に果してその價值を認め得るのであるかと申しますと、名を聞くと云ふことに依つて、初めて、この四十八願の全部が達せられるので、此に於いて衆生は、實に安樂國に生れることを得るものなのでございます。而してこの名を聞くと云ふことは、廣告あるがためで、仁丹の販れ行きの好かつたのも、一つにこの廣告に與つて力あつたからでございます。

(5) 四、平等覺に到達せる世界の導師と成らざるべし

(上) 若シ我貪欲ヲ愛樂シテ、憶念ト、智トヲ行フコトヲ放棄セバ、

(下) 無等ノ幸福ヲ具足セル、平等覺ト、力ニ到達セル、世界ノ導師トナラザル可シ。

前の偈では主として、希望に就いて述べてありましたが、この偈では修業方面に渡つて書れてあるのでございます。即ち世間の欲樂とか云ふやうなものばかりに耽つ

て、憶念したり、學んだりすることを、怠る様なことがあつては、駄目なのだと言ふことなのでございます。

以上四偈は、上來說かれたところの四十六願を結んだものでございます。

(6) 五、廣大なる光の限りなき主

(上)廣大ナル光ノ限り無キ所ノ主ハ、方ト方トノ間(四方四維上下)ノ、一切佛國ニ於テ、光リ輝カン。

(下)一切ノ貪慾、瞋恚、愚痴ヲ滅亡シ、地獄趣ノ火ヲ滅亡シ、破壊ス。

「廣大ナル光ノ限り無キ主」と申すことは、世間自在王如來のことを云つたものでございませう。

「方ト方トノ間」と申しますのは、仲々面白い文字の使ひ方がしてございます。これは即ち四維上下のこととございまして、十方佛國と云ふのを、かく方と方との間と云つて表したものでございます。

「貪慾」と申しますことは、慾望のこととございます。日本で云ふ貪慾は、主として

金錢に執着することでありませうが、此處で云ふ貪慾は、單に金錢上のみの慾望でなく、色慾と云ふやうなものも含んだ、一切の慾望のこととございます。

「瞋恚」と云ふことは、忿怒のこととございます。次の「愚痴」は「知慧」のないことで、貪慾瞋恚愚痴と、この三者は常に相關聯するものでございまして、貪慾と云ひ、又瞋恚と云ひ、すべて愚痴から起るものなのでございます。それでございませうから、この愚痴と云ふのは、實に三毒煩惱中の基本なのでございます。

この偈は要するに、斯ふ云ふことになりました。廣大無邊なる光明は、よく十方の佛國に於いて輝いて、一切の貪慾、一切の瞋恚、一切の愚痴を打ち消し、地獄にある火迄も、消滅してしまふことであらうと云ふので、即ち師佛の光明の偉大を稱讚し、自分(法藏比丘)もこれと等しからんとするのであります。

(7) 六、一切の黑暗を破る

(上)光輝ト威力ヲ生ジ、一切ノ人ノ黑暗ヲ破リ、

(下)善ク周遍セル光輝ヲ以テ、不時(ノ難)ヲ殘ス所無ク(去リ)、天ノ限無キ威嚴

アル(所)ニ導ク。

この偈では師佛の光と威力との二つに就いて述べてござります。「一切ノ人ノ黑暗ヲ破リ」と申しますことは、都ての人々の暗黒を破つて、智慧を興へることでありませう。「普ク周遍セル光明」と申しますのは、普く行き届いた光明のことで、燈臺やら探照燈やらの光の様に、限られた光明ではござりません。原文には Supariyasuna とござります。故に私はこれを普く周遍せる光輝と譯したのでござります。

次に「不時」と云ふ字でござりますが、大變妙な文字でござります。不時の難と申しますると、思ひがけない災難のことで、長崎丸の様に途中遇然の故障のために、入港が出来ずに、吳淞の沖で碇泊してゐると云ふなど、全く不時の災難であります。此處はつまり、普く遍滿せる光明によつて、不時の災難が除かれ、無限の威力ある天國に導くと云ふこととござります。

(8) 七、太陽も天に輝かず

(上)太陽も天ニ輝カズ。摩尼(珠)ノ集リ、火ノ光諸天モ亦(同ジ)。

(下)人帝ノ光ニ依リテ、一切ハ覆蔽シ、宿昔ノ行ハ、完全ニ清淨ニ行セラレタリ。この偈は即ち師佛の光の威力を、讚嘆したものでござります。

「摩尼」と申しますのは、よく光る珠玉の事でござります。夜は暗ふござりますから、螢でもピカ／＼光つて見へます。晝は明るいから光るのが見えません。これは即ち太陽と云ふ光明に遮げられた爲めでござります。然るに彼の佛の光明は、其の様な太陽の光迄輝く力を失ふので、太陽のみではござりません。摩尼の光だらうが、火の光だらうが、都て光あるものは、其の輝く能力を失ふと云ふのでござります。

次に「人帝」と申すのは、梵語で Narendira のこととござります。こゝでは世間自在王如來を指して居ります。つまり此處は、人帝の光明に依つて、一切は覆はれて、ずつと昔からの希望が、残すところなく、綺麗に行はれたと云ふこととござります。

こゝまでの四偈は、師佛の徳を讚嘆したものであります。

(9) 八、佛の獅子吼を吼へん

(上)丈夫中ノ最上タル者ハ、不幸(貧窮)ノ者ニ、伏藏トナル。此ノ如キ事ハ、十方ニ於テ無シ。(下)一切百千ノ善ヲ圓滿シ、衆ノ中ニ佛ノ獅子吼ヲ吼ヘン。

「丈夫」と申しますのは、男子のことです。丈夫中の最上者と申しますのは、男子の最も勝れたもの、ことで、男の中の男と云つた具合のものであります。

「不幸者」と申すのは、貧窮な人のことで、單に、金や家財に窮乏してゐるのみでなく、智識にも貧乏な人のことでもあります。次に「伏藏」と申しますのは、土の中に寶を隠して置くことを云ふので、上にさらけ出してをきますと、泥先生から侵される氣遣があるので、土の中に埋藏すると云ふ習慣が、古代から印度にあつたものであります。伏藏と申すのは、即ちその意味なので、仲々面白い文字でございます。この文字は度々お經の中に出てくる文字なのでございます。「獅子吼」と申しますのは、一昨日も申し上げました通り、佛の辯舌を獅子の吼ゆるのに譬へたものでございます。これからの以後の偈は、法藏比丘が、誓を結んで證を請ふたものでございます。

(10) 九、有情の最勝者とならん

(上)往昔ノ本在ノ勝者ヲ供養シテ、無數億ノ苦行ヲ行ジツツ、

(下)最勝ト、平等智ノ蘊ニ於テ、願ト、カトヲ満足シ、有情ノ最勝者ト成ラン。

「往昔」と申しますのは、宿昔と同じく、昔と云ふ程の意味でございます。次の勝者と云ふのは、ちよつと妙な字でございますが、原字は Jina で、勝は excellent と云ふ様な、「勝れる」と云ふ意味ではござりません。Conquer, Victory 等の「勝つ」と云ふ意味なのでございます。即ち Ajita の Ji と云ふのと同じ字で、負る事ではござりません。張作霖の様に勝つた人のことであつて、此處の勝者と申すのは、即ち佛のことを云ふのでございます。

然るに次の最勝に參りますと、勝者の時の様に、「カツ」とは讀まぬので、「スグレル」と讀みます。今度の勝は原字は Vara の方で、Most, excellent 等の意を持つてゐまして、勝者の勝とは明かに相違致して居ります。

次は「蘊」でございます。これは原字を Skandha 云ふので、これは Group, troop 等の意味の字でございます。衆合とか群集等の字でございます。曾つて、般若心經

を講義致しました節、色、受、想、行、識と、この五つの蘊に就いて、説明致しました。あの場合の蘊と同じものでございます。あの人は蘊蓄のある人だとかよく申します。つまり集りのことであつて、蘊蓄と云へば、學問に博く深いことを申します。が、何れにしてもこの字は、決して個々別々のものに向つては用ひられぬ文字でございます。

次に「願ト力トヲ満足シ」と云ふ文字がございしますが、これが仲々緊要な文字でございします。私でも願ぐらひのことでありましたら、どんな都合のよいことでも云つてやります。而し乍らそれに力が供はらなかつたら、願として全く價値の無いものでございします。處がこの偈では、そんなあやふやな事は誓つてございせん。願と力と、この二つを満足しと、明かに誓はれてあるのでございします。願と力と、これ實に印度文の妙味ある處だと思ひます。これを見ると印度文が、都てこの「アナリタイカル、サイエンス」に出來てゐることを、靦面に感ずるのでございします。勿論支那文も、仲々立派な書物を出して居ります、而も尙、落度を見出さぬわけに參りません。韓非

子の論文など實に立派なものでございしますが、矢張り多少の缺點を有するので、支那文は到底印度文に及ばぬのでございします。

(11) 十、人中の導師たらん

(上) 其ノ世尊ハ、無着ノ智ト、見トヲ以テ、有爲ノ三界ヲ知レル人帝。

(下) 我モ亦等シク、布施ヲ受ケル、人中ノ導師ノ最勝智者タラン。

「無着」と申しますのは、物に執着の無いことで、一切は皆空であることと知ることとでございます。次の智と見とは、どちらにも似た様な字でございしますが、智の方は靜的の形でございまして、見の方は動的の形なのでございします。

この偈は要するに智と見とを稱嘆し、自分もかくあらんと、證を誓うたものでございします。

(12) 十一、是の如き本願が満足して

(上) 若シ我ガ人帝ヨ、是ノ如キ本願ガ満足シテ、菩提ヲ證スル事ヲ得バ、

(下) 千ノ世界ハ震動シテ、天衆ヨ、花ノ雨ヲ降ラセ。

「人帝」と申しますと、此處ではやはり世間自在王如來を指して居ります。
 「千ノ世界」は、即ち三千大千世界のことです。その三千大千世界が震動して、とありまするが、一昨年東京方面に起つた地震の如きものでは駄目なので、かうした局部的の震動は、却つて有害なものでございます。此處の震動は、大分優等な震動で、地球あたりは一日中くるくゝ廻轉して居りましても、我々は何とも感じは致しません。さう云ふ具合に優等な震動を云ふのでございます。
 これは大願成就の曉の有様を云つたものです。

(13) 十二、世界に佛とならん

(上) 地モ震ヒ、華雨モ降り、百ノ音楽ガ、天ニ奏セラル。

(下) 天ノ勝レタル、チャンダナノ香ハ、散セラレタリ。而シテ、聲アリテ、世界ニ佛トナラント云ヘリ。

この偈は、地も震ひ、華雨も降り、百の音楽が天に奏せられ、天の勝れたチャンダナの香が散せられたと、即ち斯くの如き瑞應を以て、超世大願の必ず成就せられること

とを、天から保証したものでございますが、私は其時、其處に居りませんでしたから、どんなやうな具合であつたものか分かりませんが、まあ大變なことであつたのでありませう。支那譯では、この處散文になつて居ります。

チャンダナの香とありますが、このチャンダナと云ふのは、原字は Candana で英語の Sandal tree で、學名を Santalinum Album と申します。日本で云ふ白檀のことです。

以上で偈陀も濟んだわけでございます。今日の處はこれでお終ひでございますから、これで御免を蒙ります。

(三) 修行

第十一章 法藏菩薩誓願成就と修行の相

(1) 法藏菩薩誓願を具足成就す

阿難陀ヨ、此クノ如キ誓願ガ、法藏比丘菩薩大士ニヨツテ、具足シ成就セラレタ

リ。阿難陀ヨ、菩薩トシテ、此クノ如キ誓願ヲ、具足シ成就スル事ハ稀ナリ。此クノ如キ誓願ハ、世間ニ現出スル事ハ、極少ナルモ絶無ニ非ズ。

本日の處は原文は長うございますが、非常に易い處でございます。然し翻譯には中々骨を折りました。

昨日の處までは法藏菩薩發願の模様を説かれてありましたが、本日の處でこの第十章の全部は、其の願を如何にして行うたのであるか、即ち其の實行に就いて書かれてあります。第十一章に於ては、自分の希望が完全せる模様が書かれてあるのでございます。

此處では「法藏比丘菩薩大士」と出て居ります。今迄は比丘のみで、法藏比丘とあつたのですが、此處に来て初めて菩薩大士の増加してゐるのを見るのでございますが、是れは一體どう云ふわけであるかと申しますと、願を起す迄は資格と云ふものが未だ出来て居らないから、單に比丘のみで表されて居るので、願を起し終ると随つて、資格と云ふものが出来ますので、菩薩大士を増加して、法藏比丘菩薩大士と云つたもの

で、特にこれと云つて意味のある文字ではございません。まあ早く申せば文章の一つの綾とでも申すものでございます。而してこの大士と申すのは、昨日も申し上げました通り、大人とか或は尊者とかの意味の字なのでございます。

次に「具足」と云ふのは、度々申し上げる様に、缺けた處のない、完全してゐると云ふこととございまして、次の「成就セラレタリ」と云ふ文字に通ずるものなのでございます。この邊も印度文が、アナリテイカル。サイエンスに出来て居る處で、支那文など

、比較して、遙かに優れて居る點なのでございます。次に「阿難陀ヨ、菩薩トシテ此ノ如キ誓願ヲ、具足シ成就スルコトハ稀ナリ。」とございますが、其の次に「然し乍らかゝる誓願が世間に現出することは、甚だ稀なことであるけれども、全然ないことではないのだ」とありまして、即ちオンリイ・ワンだと云つてあるのでございまして、誓願不思議を讚嘆したものでございます。

(2) 法藏菩薩誓願を宣説し誓約し確立す

復次ニ、阿難陀ヨ、法藏比丘大士ハ、彼ノ世尊世間自在王如來ノ前ニ、諸天ノ世